

昭和四十四年十月
編一號五月
五號
日
三
一
年五月

通類掘

山崎信


大石松之丞

實山延若



第一十卷
第五号

この會社……この保險

一番大きな會社であること。一番すぐれた内容を持ち、一番信賴出来る會社であること。保險料は安く而も多額の配當を行ひ、又優秀寛大な保險約款により親切な取扱をする會社。つまり會社もその提供する保險も理想的な會社。これが日本生命であります。

(營業案内贈呈)

日本生命

大坂市東區今橋四丁目

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

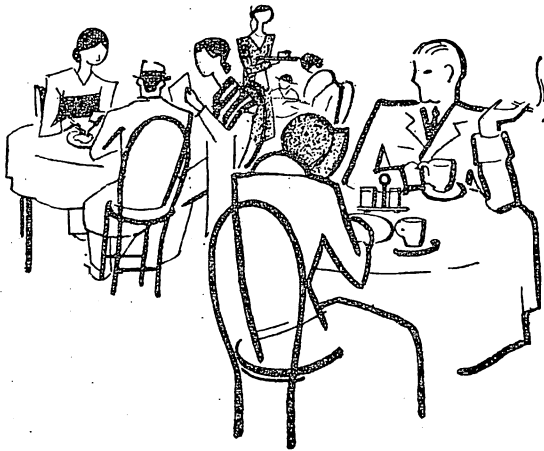
道頓堀戎橋北詰

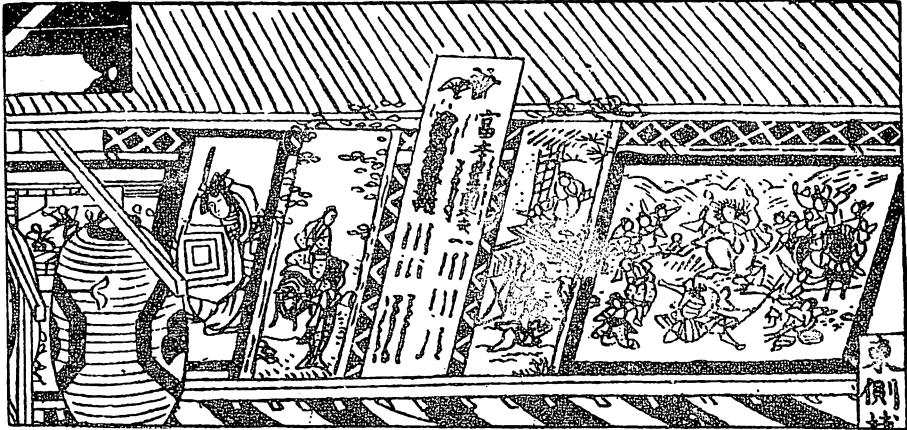
御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を!

支店

大阪支店 心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋





◇道 頓 堀・第十一年・五月號・第百十六輯◇

■歌舞伎座「勘進帳」勘彌の富怪・我當の辨慶・扇雀の義經・梅ごよみ勘彌の丹次郎・芳子のお蝶・松延の仇吉・鶴之助の米八「一條大藏卿」舞臺面・牛盗人初彌の刑部三郎・鶴之助の妻雪江「心中紙屋治兵衛」成太郎の小春・我當の孫右衛門・扇雀の治兵衛「鎌倉三代記」松延の時姫・我當の高綱・扇雀の三浦之助・辯天娘女男白浪舞臺面・忠臣藏をライカで描く(本誌特寫)■中座家庭劇「脱線親爺」天外・東十吾地上の星・石河・小織・東「金脈と銀脈」舞臺面 ■浪花座「白野辨十郎」鳥田の白野・荒神山」辰巳の次良長

◆表 紙……………忠 臣 藏
◆扉 ……………扇雀の紙治

名優を父に持つ……………中山楠雄(三)

兩君への期待……………高澤初風(四)

二つの手紙……………西尾福三郎(五)

×樂屋より×

市川松莚(七)
片岡我當(三)

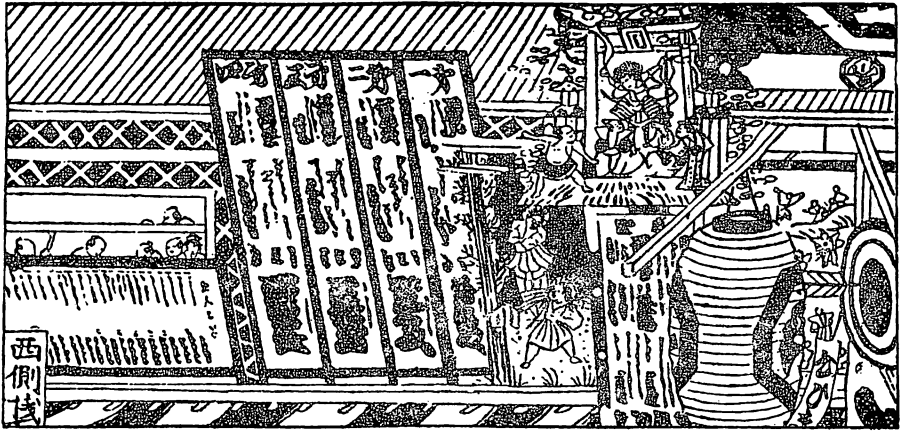
中村成太郎(七)
松本高麗五郎(七)

牛盗人に就て……………落合浪雄(八)

地上の星に就て……………額田六福(三)

……上演狂言マメ解説……………(八)

梅王と延若、壽三郎……………高安吸江(八)



梅野井秀男と語る十分間

語る人

梅野井秀男

(一)

森 ほんのほ
(側記 大橋孝一郎)

舞臺 雑話

瀧 連子 (二)

關西新派樂屋風景

順田 寛二 (三)

澤村宗十郎系譜

紙魚 庵 (三)

型の研究・その三

勸進帳「辨慶の型」

編輯部編 (三)

辰 己ご島田

菱田 正男 (三)

忠臣藏 ナンセンス

森 ほんのほ (三)

中座と浪花座

秋月 好光 (三)

豆劇 評

森 あき子・谷 健一 (四)

異つた二人

岡田 孤煙 (三)

劇團の變轉

都築 文男 (三)

私の女房役 (7)

大槻 たもつ

漫 諧

カ ッ ト

山中 虹二

編輯後記

大橋 孝一郎 (三)
村上 勝

天

下
之
銘
酒

シ
ラ
ユ
キ

白雲



傘
に
色
よ
い

濡
れ
燕

酔
も
ほ
と
よ
き

白
雲
の



梶
津
伊
丹
灘

小
西
酒
造
株
式
會
社

歌 舞 伎 座 東 西 合 同 大 歌 舞 伎



五月興行
— 畫の部

「勸進帳」

富樫左衛門
勘 彌

辨 慶
我 當

義 經
扇 雀

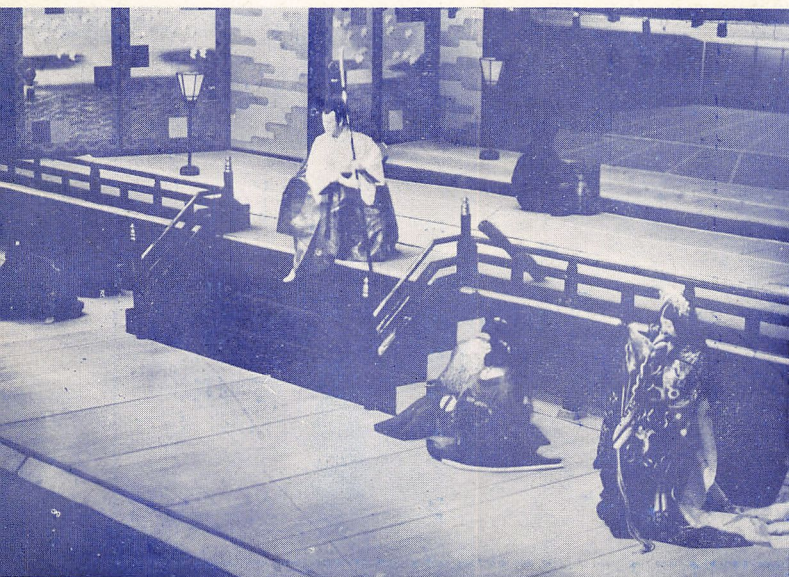


彌 勘 郎次丹屋琴唐
子 芳 蝶 お

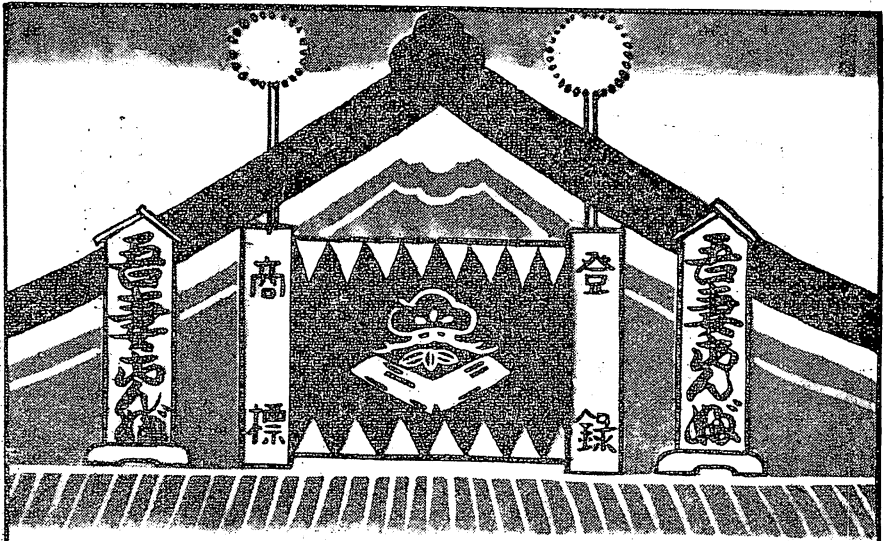
「みよご梅」



蕊 松 吉 仇
助 之 鶴 八 米



「二條大藏卿」 奥御殿の場



一、健康ニ昆布

昆布ハ我國ノ特産デアリマス。

昆布中ニハ澤山ノ「ヨード」ヲ含有シテ居リマス。

特ニ「酢昆布」ハ其ノ含有量ガ一番多クアリマス
 昨年大阪市立衛生試験所ニテ發表セラレ新聞ニ
 記載サレタコトハ「食物中「ヨード」ノ
 最も含有量ノ多キハ昆布ナリ」
 デアリマス。

「ヨード」ハ人ノ必要ナルモノデ皆様ノ活動、健
 康ノ上ニモ欠クベカラザルモノデアリマス。

皆様!! 滋養ニ富ム昆布

美味ノ王酢昆布「吾妻おんぶ」

ヲ召上ラレテ日々御健康!!ニ活動シテ下サイ。
 才可愛イ御子達ニモ是非!!

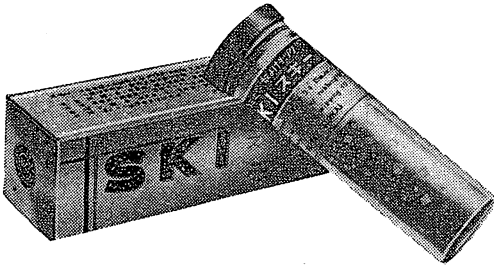
安田常次郎商店 吾妻昆布本舗

大阪市浪速區元町五丁目

電話一〇八番

カユミ止
蚊よけ
チツク型

SKI
ス
キ
ー



毒虫ノ襲來ヲ防ゲ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫
等嫌ナ毒虫モスキーノ使用ニ依テ完全ニ驅
逐ス

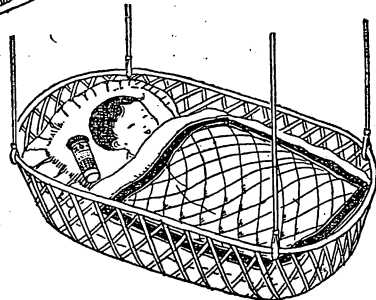
カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ルカユミヲ即
座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼兒ト
雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發
汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨ
リ佳香ニ富ム且癢痒部ノ搔傷ニヨリ化膿菌
ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

價四十錢

デパート藥品部・藥店ニ有リ

蚊や南京虫に
攻められて



スキーの御蔭で
スヤ〜と

大阪市東區伏見町三丁目二七

製造發賣元

光 榮 商 會

電話北濱三三一五番
振替内阪三三一七番

夜の部 「牛盗人」

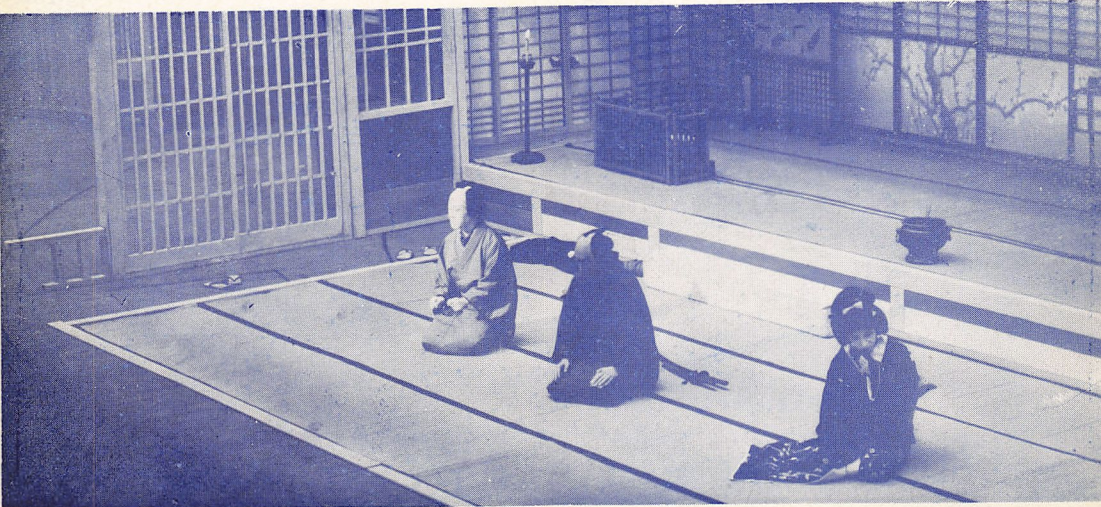
刑部三郎
三郎妻雪江

勘彌
鶴之助



「衛兵治屋紙中心」

雀扇・衛兵治當我・門衛右孫郎太成・春小





時

松 姫

菫

佐々木高綱

我

當

三浦之助

扇

雀

「記代三倉鎌」

高級花
16
られ

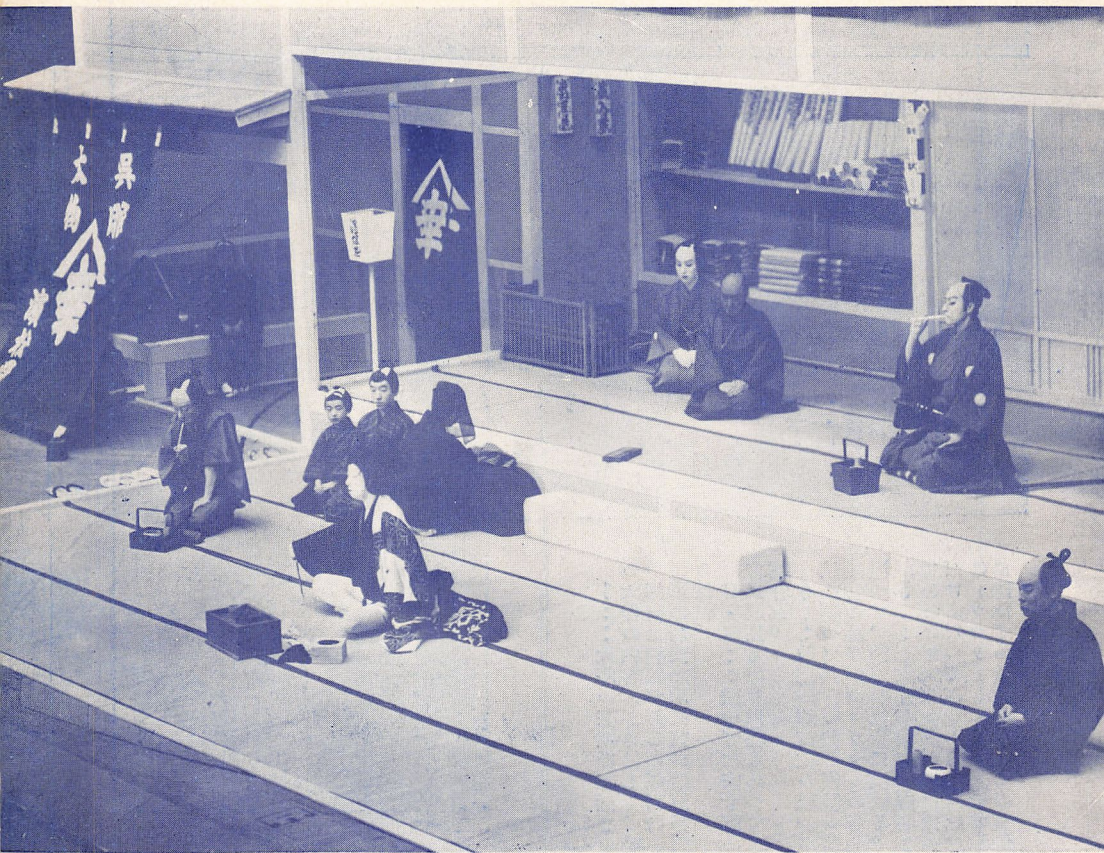


野田製霰工場

店主 野田 五男

大阪市浪速區元町五丁目

電話 戒二一九九番



「浪白男女娘天辨」

場の屋松濱



1

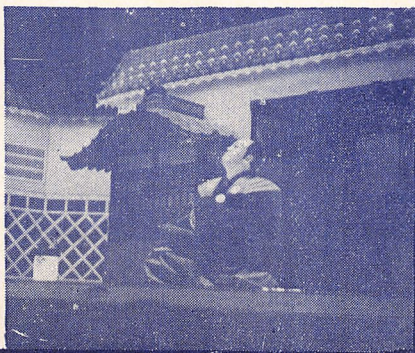


2

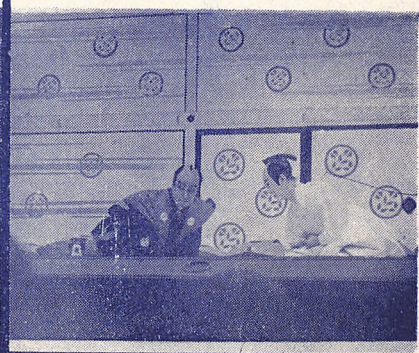


3

1:::大序の莊重な幕開きは此
 の大作の内容にふきはしく、延若
 の師直は色氣があるので面白い。
 魁車の若狭之助は芝居氣が多過ぎ
 る様だ。
 2・3:::殿中では宗十郎の判
 官が氣品もあり風格もあつてよい
 判官だ。
 4:::前幕の師直役の延若が大
 星に變つて判官の前の復讐を誓ふ
 燒香の臭ひがカメラマンの鼻先に
 漂つて、愁傷な氣分に満つる。
 5:::七段目の前半が省略され
 てゐるので大星の見せ場は此の幕
 だけになつてゐる。延若は此處で
 はシツカリとした腹を見せて流石
 に關西での立役者としての貫録を



5



4

7



6



8



示して餘りある。

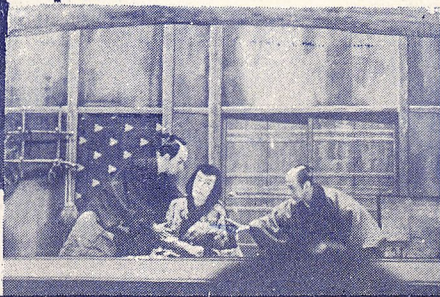
6・7：：梅玉と魁車が江戸ご
のみの振り事を見せるが、どうも
清元の人ではない様だ。長三郎の
件内は愛嬌も十分に此の人の當役

8：：山崎街道は此の劇中での
氣分轉換に役立つ作者の頭を見せ
た舞臺であつて、定九郎の壽三郎
にはスッキリとした吉右衛門の味
には乏しいが、その變り關西歌舞
伎特有のねつとりとし演技が此の
一座にはふさはしい。

9・10：：梅玉の勘平は豫想外
の上出來で世話味たっぷりのよい
勘平だ。庭女のおかやは如何にも
院本もの人らしい。

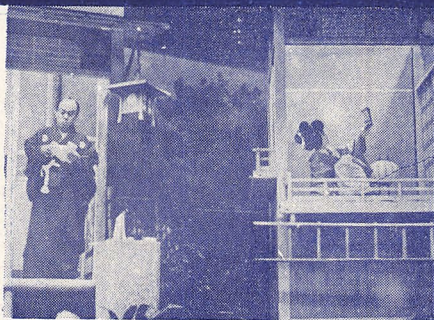
11・12・13・14：：七段目は前半

10



9





11



12

がないので由良之助の芝居が削が
れてゐて、平右衛門とおかるの芝
居になつてゐる。魁車のおかるは
體を動かし過ぎる欠點があるがお
客様には大受けて、壽三郎の平右
衛門も律義者の一徹さをよく出し
てゐる。

15：：旅路の花嫁は呂太夫以下
文樂の特別出演で十分耳を樂しま
せて呉れる。

ご曹子達の踊りも遠見と云ふ趣
向で活かされた。

16・17：：梅玉も老け役が似合
ふやうになつて來た。

延三郎は顔見世の時より美しく

13



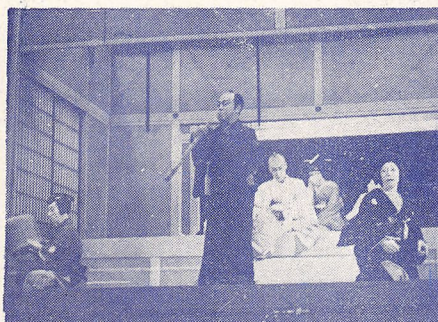
15



14



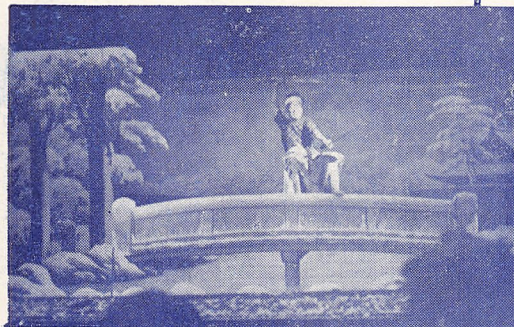
17



16



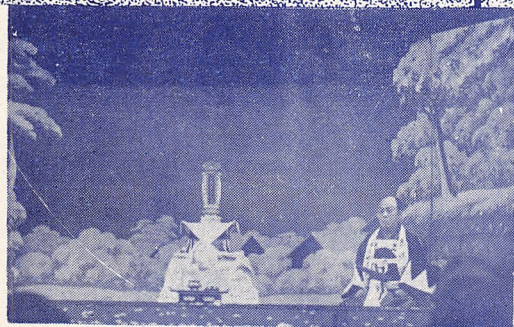
18



長三郎の力彌が萬年若衆で活躍する。宗十郎の戸無瀬は流石に疊込んだ腕の確かさを示して熱演するが、どうも九段目と云ふものは小芝居の感が深いもので成駒屋の山科閑居の方が面白い気がする。

18…討入は若手俳優の映畫風の立廻りが見もので、こゝをぜんぞと奪目さましい。

19…焼香は只全俳優顔を揃へると云ふに止つて、大序の莊重さに比して、此の終局はいささか淋しい。



19

忠臣藏を ライカで 描く

本誌特寫

春
天
雄
外

その戀人陽子
東

春雄の父
十
吾

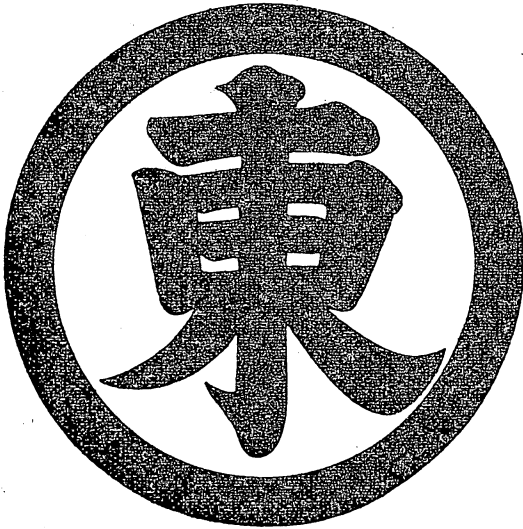
劇庭家座中

「爺 親 線 脱」



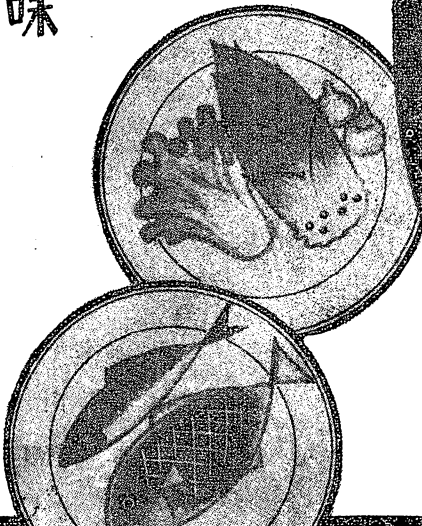
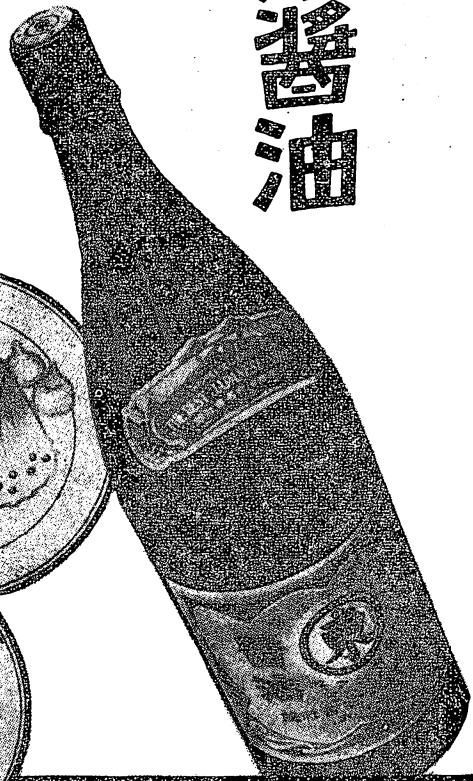
うすくち

ヒガシマル醤油



淡い紫

濃い味



兵庫縣龍野 淺井醤油合名會社

金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉

で御座います

1. 不意の御來客に

1. 御酒ビールの御友に

1. キャンピングに

1. ハイキングに

1. 各地百貨店

著名食料品店

に販賣致して居ります

1. キンケイ印を御指定下さ

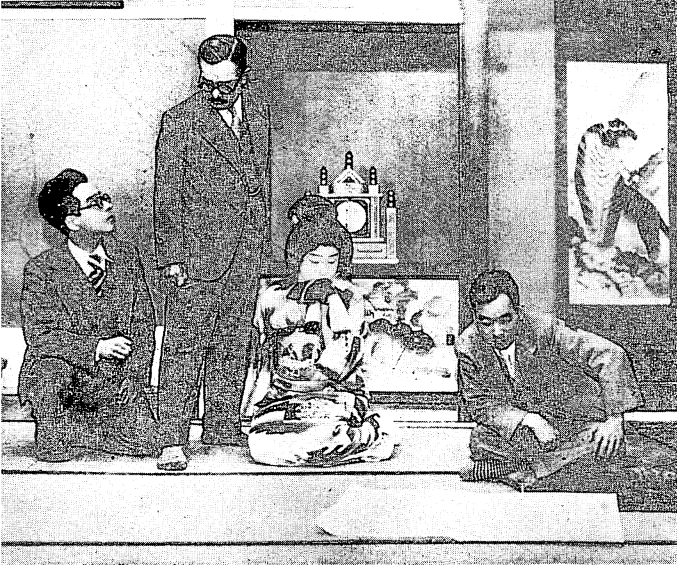
い



洋酒・飲料水・罐詰

株式会社 横山商店

大阪東區豊後町三



「金脈と銀脈」舞臺面



浪花座新國劇

田島・野白「白野辨十郎」

巳辰・長良次「荒神」



月刊・演劇研究・雜誌

通類編

第十一年

五月號

第六十輯



—— 扇雀の紙治 ——

中
山
前
館

山
東
館

三
木
館

扇雀・我當・松莛を語る

中山楠雄
高澤初風
西尾福三郎

名優を父に持つ

—扇雀と松莛の場合—

中山楠雄

のである。

扇雀は云ふ。

「扇雀に逢つた時、彼は世評を氣にしてゐた。世評とは、扇雀の藝が鴈治郎の模倣に終始してゐると云ふことである事實、鴈治郎に似てゐることとは扇雀自身も承認してゐる

のである。扇雀は云ふ。「親子ですから姿、形まで似てゐるのでせう。顔造つて見ても親父に似てゐるな、と思ふことがあります。第一に親父の藝の巧さを認めて居り

その人と一緒に生活し、同じ舞臺に立ち、同じ役を勤めるのですから、似せまいとしても似て來ます。一時は、似てゐると云はれることを恐れて親父の型や考へつきさうな仕草を片つ端から避けて芝居したことがあります。が、結局あゝでもないと自分で色々に工風して見ますと親父の型に辿りつきますし、矢張り親父は偉かつた、と今更のやうにその工風の巧みに感心して

しまひます」
更に彼は「所詮芝居の勉強をするには誰かしら先人の型を學ばなければなりません。獨りよがりの工風で満足してゐられるものではありません。誰かの真似をするとなれば、誰よりも身近で事實尊敬もしてゐる親父の通つて來た道を検討しつゝ、踏襲するものは踏襲し、更えべきものは更えて、私一家の風を造り上げるに如くはあるまい、と思ひま

す。所で、御存知の通り父は人一倍の工風屋で、同じ紙治にしろ、始めからと晩年とでは全然と云つてよろしい程型が變つてゐます。いや今日の紙治を精密に云つたら不測の工風が加つて、毎晩少しづつ變えてやつて居ました。斯うなると不肖な私が工風した、或は工風すると云つても、實は父の工風を一步も出ること出来ないのではないかと不安になります」

段四郎が、猿之助と餘りに

も似てゐることを苦にして長谷川仲氏にその苦衷を訴えたから、「馬鹿なそんなことがあつてものか、親父の方がすつと巧いさ。似てゐるとかゝるないかを苦にするよりも、寧ろ似る勉強をした方がいゝ」と云はれたさうだが、私も扇雀に同じことをすゝめたい。似てゐるて悪いのではない、親父の滓だけのやうな洗練されない藝を人は悪評するのだ。親父通り、或は親父以上だつたら文句はないのだ。

二

松建に逢つた時、

私は仕合せ過ぎます。親父は旅へばかり出てゐますし、兄貴(田之助)は新派の中へ這入つて、自分の演りたい勉

強が出来ないのに、私だけは重い役をつけて頂いて斯うして働いて居ります。有難いよりも勿體ない氣がします」

さう、松建は云ふ。

全く、松建は運のよい男だ。宗十郎や田之助には氣の毒だが、紀之國屋の仕合せを一身に引き受けて居る。紀之國屋の仕合せを一身に集めるに足る程、松建は傑れた役者だらうか。

松建は立派な柄を持つてゐる。容貌も美くしい。藝の上で今の松建を何うの斯うのと問題にしては氣の毒だから云はないことにするが、將來性は大きいにあるものと云つてよろしい。役者位、運、不運のあるものはない。境遇に恵ま

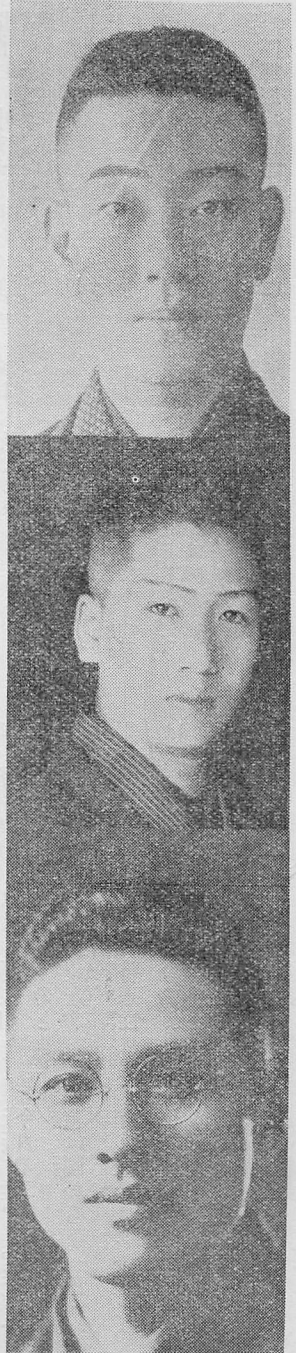
れず、よい役を舞臺の上で取れない、と、よし才幹あるものでもその才能を發揮されずしてやむ。松建は、屹度、大物になるだらう。

が、松建の幸福兒だと云ふ言葉も仔細に考へれば偶然ではない。彼は、宗十郎以上に人づき合ひのよい伶俐者だ。この處世上の伶俐者は、必らずその藝の上にも仄いて來るに違ひない。

三

今日の二人の悪口を云ふと松建は腰から下へ色氣がない扇雀の缺點は含み聲にある。斯う並べて見ても大した缺點

ではない。矯正しようと思へば即くなほせる缺點だ。



兩君への期待

——東の我當、西の扇雀——

高澤 初風

青年歌舞伎一座へ加入して
から扇雀君が東京で見せた狂
言は、悉く亡父寫しのもの
ばかりだった、而もその演技
の部分々々がよいにつけ、悪
いにつけ殆ど鴈治郎を若くし
て見る如くだつたので、見物
の興味は唯その點に集注して

喜ぶ者のある一方に又餘りに
亡父の眞似ばかりすると批難
する者もあつた、併し子が親
に似るのは當然で、舞臺上を
の演技を模倣したとて一概に
批難すべきでない、が唯恐る
べきはその將來を顧慮する時
にある、扇雀君が東京で出し

た狂言は紙治の炬燵と河庄、
梅忠の封切、石切梶原、土屋
主税などがある、さうした亡
父の當り狂言を是から先悉
く出し切つた後に、さてどん
な狂言を見せるか、つまり亡
父の倣を生寫しの狂言には
扇雀と云ふ個性が見られな
つたのだから、その寫しを除
いて扇雀と云ふ俳優を、丸裸
にした藝を見せる時にはどん
な事になるかと云ふ事なので
ある、勿論修業時代は藝界ど

の方面にしても、名人の模倣
と云ふ事は當然あるべきで、
決して批難すべきでないが、
その型の踏襲から一步も出な
いやうになると、個性は没却
されて遂に永久に自己が生れ
て來ない、と云つて扇雀君の
場合に、亡父の眞似をするな
と云ふのではない、鴈治郎は
近代稀に見る名優、その遺さ
れた型や演技のいゝ處は飽く
までも採らなければならぬ
がその中にも又子としての本

當の藝と味、即ち個性をも發揮して行かなければならないそれを扇雀君に囑望するのである。



親に似ぬ子は鬼ツ兒と昔から云ふ、だから扇雀君は鬼ツ兒でない、が我當君はその點から云ふと鬼ツ兒である、彼は亡父仁左衛門に容貌も藝風も味も、少しも似てゐない、又彼自ら亡父の模倣をやらうともしない、唯だ始めから自己本意で一直線に進まうとしてゐる、その意氣は大に壯とすべきである、だが今の處彼にはまだ自己がない、世話物になると六代目(菊五郎)時代物になると幸四郎で行かうとする、そのために臺詞にも

動きにも、稚拙的な一種の滯を來す事がある、總べて舞臺を大きく見せやうとするがために、『勸進帳』の辨慶の如きは、青々園氏に「君臣の禮を失する」と云はれ、一部の見物からは口の中で云ふ臺詞が何だか判らぬと批難される、だが是は技藝上の枝葉の問題だ、彼は今の處全く未成品だが、將來確かに大きな俳優になる資格を持つてゐる、勸彌のやうな達者で繊細な味はないにしても、それは憂ゆるに足らない、唯恐るべきは此大きく見せやうとする氣持ちが周囲から誤られて禁物の邊心に陥る事があれば、未完成のまゝでもう上達の見込みがなくなる、先輩の型や

味を踏襲しやうとしてゐるのは、扇雀君が亡父の舞臺を再現しやうとしてゐるのと同じ意味にもなるが、併しその立場から云ふと非常な相違がある、我當は何處までも自己本位で行くべきだが、扇雀君に

二つの手紙

——扇雀君と我當君へ——

西尾 福三郎

扇雀君
昨年の十一月京都南座で東西青年歌舞伎一座の結成があつて以來七ヶ月、二月の大阪歌舞伎座は生憎の病氣で僕は見る事ができなかつたので、この所半年振りて君の舞臺を拜見する事になつた。京都から神戸、東京、大阪、又東京と到る所好評で迎えられる事は陸作ら喜ばしく思つてゐたその間の君の役所は大抵お父さんの賣り込んだ十八番物許りだつたのは僕としては些か

物足りないと思ふ。興行策としてそれは安全第一かも知らんが、君自身の爲には決して喜ぶべき傾向ではないのだ。父の遺業を踏襲する事は結構だが、君が今一生懸命お父様の残しておいた偉大な記念碑のお掃除をしてゐるのを見た人が、あれでは折角大鵬治郎の耀やかなしい記念碑の錆びを落してゐるやうなものだと、若し云つたとしたら何うだらう。君自身では一廉親孝行のつもりのお掃除が他人目には却つて折角の風韻を損ふやうな結果になる事があり易い。見物が褒めるから、自分が演易いから、仕打が進めるからと云つてさうした物に安住してゐないでもつと外に君

自身の物を見出して貰ひたい昔關西青年歌舞伎華やかなりし時代の『辻斬り』『蛙』『四つの袖』と云つた作品と取組んでゐた頃に較べて、この頃の君には何か知ら沈滞した気分が感じられてならない。忌憚無く云ふと名門に育つて少より一座の統領と仰がれてきた爲に得をしてゐる所もある代り一面で損をしてゐる點も多い。

この道理をよく考へて、當分父の物は餘り演らない方がいゝのではないか。止むを得ない場合には、自分だけの記憶や研究に頼らず、亡父門下の老練者に精々問ひ訊して遺憾の無い演出を見せて欲しいものだ。

如才の無い君は會つて話をする人の意見は何事にもハイ／＼と柔順しく聞いてくれるが、心の中は相當の自信家で、これは眞の八白と云ふ歳の性分かも知れないが、馴染の浅い僕の失禮な云ひ分を咎める事なく聞いて貰えたら幸ひである。

我當君
去年南座興行の時二度許り君に會つたが、それ迄は我當と云ふ人は可なり神經質で五分の隙もない人だときいてゐたが、第一印象は頗る明快で非常に感じのいゝ人だと思つた。その時の話では今迄青年劇の評判が餘り良過ぎるので蓋を開けてみて何だ我當と云

ふのはこんな役者だつたのかと思はれはしないかと、それが心配だと語つてゐたが、一般の評判は期待以上に良かったのはお目出度い。

君は扇雀君と違つてお家物を演る時にも大體先代の型を忠實に寫す行き方を避けてゐると語つてゐるが、この點兩者の對照が色々の意味で興味を感じさせる。先代そつくりの扇雀君が乃父の型を堅守するに比し、先代とはやゝ型も肌合ひも異なる君が敢然として独自の行き方を求めやうとする所が面白い。その是非が何れにあるか今遽かに論じ難いが、君と扇雀君とは今こそ東と西の代表的な次の時代の好選手と云はれてゐるが、元は

兩君共同じこちらの和事を主とする名家の出だ。大阪で生れて大阪で育つた扇雀君のコツテリとした味と、大阪の血を惹いて東の水で洗ひ上げた君のスツキリとした味、かう竝べてみる所に無限の興味が湧いて来る。忠兵衛と八右衛門、それに對する與次郎と傳兵衛、これこそ詠え向きの好配である。その意味で今度の河庄に君が孫右衛門に廻るとすればこれ亦興味のある観物となるであらう。去年君に會つた時にも寺子屋、堀川、梅忠の次ぎには河庄で顔合せがしたいと語つてゐたのを思ひ出す。

その外の今度の演し物では一般の興味は勸進帳に集まる

だらう。君が今頃こんな大役を演らうとは實際思ひがけなかつた。勸進帳と云ふ芝居は誰にも好かれ、又誰が演つても相當見られる芝居だ。極端に云へば辨慶も寛樫も儲かる役だから一と通りは受けるに決つてゐる。恐らく君の辨慶もきつと評判になるに違ひない。近來勸進帳と云ふ狂言は興行的に（舞臺上の意味でなく）粗末に扱はれ過ぎてゐて有難味が尠くなりつゝある折柄、今後手心があると云つて無暗に持出す事なく、將來の或る時機迄秘藏研鑽されるやう特に希望しておきたい。何彼と無駄な事を書いたか不遜の點は幾重にもお赦しを乞ふ。

シリウタオネに核結

…科病柳花…

院医原藤

★ 番六三六二戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

シリウタオネに核結

歌舞伎座五月興行上演脚本

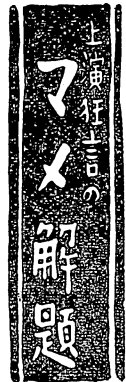
牛盗人に就て

落合浪雄

あまりに遠い昔のこととどなたにも興趣のない話でせうが、「牛盗人」に就いて思ひ出されるのは當時將軍と呼ばれた故田村成義先生のことであります、不圖したことから私は先生の知遇を頂き、歌舞伎座に私の「流人」が上演され、當時の豪華なキャストで私には身に餘る處女上演をやらして頂いたのです。これが明治四十五年の六月、その年の暮、改元された大正元年の十二月、先生が思ひかけもなく突然私の宅へ見えて、「牛盗人」の脚色をやつてくれ、役者は仁左衛門(先代)父子、正月にやりたい、處が私は何にも知りません、先生から鶯流の狂言の「牛盗人」の筋を伺ひました、そして唯うまくやつて下さいといはれたゞけでした。

田村先生はいつも或る纏まつた考へ、この場合でいへば脚色のプランをチャンと持つて居られて、そしてその當事者をテストされるその上でそれを指導して行かうといふやり方をされるのでした。

私はこの單純な狂言をどう料理すればいゝかと考へました。近く



歌舞伎座の青年歌舞伎も、南座の關西歌舞伎も既に幾度ともなく解題子の筆を患はしてゐるものゝみでありますので、今回は極く簡單なマメ解題と云ふことにしまして責めを防ぎます。

★歌舞伎座

一條大藏卿：「鬼一法眼三略卷」の四段目に當る場面です。四段目は檜垣茶屋と曲舞と館との三場に別れてゐるのが原作通りですが近頃曲舞を省略することが多くなつたのは此の芝居の價値や面白味を半減するものとして残念なことです。作者は文耕堂と長谷川千四郎の初演は享保十六年九月十三日の竹本座でございました。

勸進帳：…三代目並木五瓶の作品で天保十一年三月初日の河原崎座が初演でございました。作曲は杵屋六三郎・振付は四代目西川扇



御大典があるその儀式その装束、それが一般の話の種でした、で『牛盗人』の時代を藤原朝の衣冠束帯で舞臺も紫宸殿らしい御所にしたらと思ひ付きました。そしてそれを如何でせうと先生にお話ししました、先生はそれだ、それに限る、では幾日までにと、フイと歸られて仕舞いました。『牛盗人』を上演されるに就いてこれを御大典に當て込むといふ事は、はじめから先生のプランにあつたのを態と私の口からいはずして、そして私に一生懸命自分の創案の氣持でやらして下さる、今でもこの先生の心持には感銘が深いのであります。

その當時の配役は刑部三郎が先代仁左衛門、妻の雪江が歌右衛門、竹王は今の我當、當時の千代之助、庄司平六は卯三郎、羽左衛門が關白でしたと思ひます。舞臺裝置や考證は久保田米齋氏で仕出した通行人まで古雅な繪巻物風で、絢爛な美しいそして品の好い芝居が出来上りました。

その後先代の勘彌が先代宗之助と市村座でやりました。その時の竹王は今の義助で、この時には勘彌が歌舞伎を離れて新劇風にやつて異色ある出来榮を見せられました、一昨年AKで今の勘彌が『牛盗人』を放送するので来てくれといふので、當時の竹王の義助や今度の主役の勘彌に逢つたとき、その人達の子供心に残つた思ひ出

藏。配役は富樫が三代目市川九藏・義經が八代目團十郎。辨慶が市川海老藏でしたがこの狂言を今日の様に立派に仕立てたのは全く九代目團十郎の力と申すべきで、作全體殆ど能と同一のやり方であり乍ら、能の臭味を感じないばかりか、純粹に歌舞伎化して終のてゐる點に大いに此の狂言の價値があるのであります。

鎌倉三代記：：天明元年三月二十七日初日の江戸肥後座が初演で全部で十段。今月上演されます絹川村の場は丁度七段目に相當するところでございます。作者は未詳であります。作の内容が「近江源氏先陣節」の續篇と見做されるところから「近江源氏」同様近松半二でないかと云ふのが一般の説になつて居ります。三浦之助の見ごころは最初門口でたふれるところ、井筒に足をかけて高綱を招くところ、また高綱の見ごころは例の「地獄の上の一足飛び」ですから、ごうか御注目願ひます。

心中天網嶋：：近松門左衛門の傑作で全曲が



話を聞かされ、懐しい故人を思ふと同時に、餘り古い昔話で、私の年が知れそうに極まりがわるかつたことでした。

中座五月興行上演脚本

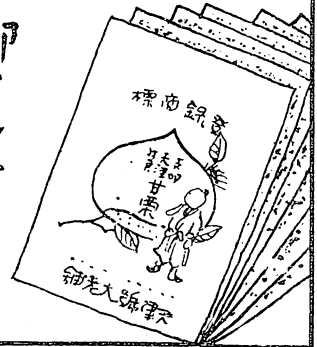
地上の星に就て

額田六福

作者は作を見ていたゞけばそれでいゝので幕の明く前にとやかう云ふ言はない——とは私の平生の主張であります。が、それぢやあんまり愛嬌が無さすぎるのでほんの一言書かして貰ひます。

石河君の本は、すゝぶん前々から山上君から頼まれてゐました。

石河君は勿論知らない事ですが、昔の有樂座時代の君はよく見物してゐましたし、岡本先生の『出雲坂の遊女』の日期なぞ、實に感心して見た者です。「將來松井須磨子に匹敵する名女優となるぞ」と心ひそかに期待してゐたんですが、その中、フツと見えなくなつて仕舞ひましたので、ガツかりしてゐた後、又十年ほどして、大阪へ歸り咲きに咲いたと云ふ事をきゝ、ついで山上君がその座の監督をする様になつて、一倍親しい感情を抱いてゐたのですが、縁がないと云ふのか、何と云ふのか、とかく今日まで無交渉に打ちすぎたのです。山上君から「岡本先生のお作も仕たし、中野君の作も度々出るのに、君が出ないのは不都合だ」と叱られるのか勵まされるの



御艾居

御見物の
御帰りに



道頓堀弁天座西竹向

天津踞

か、どつちか判りませんが、さう云ふ好意のある手紙を度々いたゞくので、今度思ひ切つて手をつけて見たのです。

これは古い人情倶楽部と云ふ雑誌に新幕守と云ふ題で一度小説で書いて發表した作で、早稲田の學生の頃よんだ、英國のピネロの作のあるシーンからヒントを得たので勿論、山は、助けられた夫人の良人が自分の昔の戀人と知らず、友人と二人で來るのを見て卒倒する處です。最時來たチエツコ(?)の『嵐』と云ふ映画が一寸これに似てをります。或は同じ原作からヒントを得たのではないかと思つてゐます。

最初は二幕三場でしたが、芝居の方で一幕二場位につめてくれとの話で、さうしましたが、五十枚で優に二幕位の長さです。小織氏の役や、高田君の役などは、私の原案には無かつたのですが、これは山十君の註文で書き加へたのです。はじめは「面倒な註文だな」と、一寸中ツ腹だつたのですが、やつて見ると、案外それでコクが出來て、原案以上によくまとまつた芝居になりました。人間さう簡単に怒るものぢやない——と考へました。呵々。

その外に云ふ事はありません。残念なことは稽古にも立合へないし、多分芝居も見られない事ですが、その中に機會がある事と思つてをります。これが甘く行つたら、少しづつ書いて見たいと已に一二材料をもらへてあります。どうかさうなる様に、俳優諸君の努力と、見物諸君の聲援とを希望してゐます。

三段の世話物、享保五年十二月初日の竹本座が初演でございました。大阪天満お前町に紙屋治兵衛と曾根崎新地の小春とが網嶋の大長寺でその年の十月十四日の夜に情死を遂げた事實をその儘に脚色したもので、上の巻が「河庄」中の巻が「紙屋」下の巻が「大和屋」から「大長寺」となつております。各場面ともまことに美文の内によく周到な心理描寫に富んで作曲されて居り、上方狂言の代表的な味合ひを持つ狂言と申して良いと思ひます。

辨天娘男女自浪……本外題を「青砥稿花紅彩畫」と申しまして河竹黙阿彌の作、文久二年三月の江戸市村座が初演でございました。辨天小僧は何と云つても五代目菊五郎のものでその苦心談は「菊五郎自傳」に詳述されて居りますから、是非御一讀あるべきでせう。女から男に變る變化の妙に「濱松屋」的一幕は價值があるのです。



市川松庭

新緑の五月程一年中で心持ちの好い時候はありません。あの樹々の青葉が清々しい朝景色何とも彼とも例えやうない——と能く申します。私が私等は到つて寢坊の方です。からまあ景色は好いとご訂正を願ひます。其點では御錦地はご新縁に恵まれた所はあまりせんと羨んで居りました。その五月興行にお招きのお話し、餘り近々の御招きゆへ一時は心ならずもお断りを申上げましたが、是非にとのお話

しに内心嬉しきや心配やらご推察下さい、夫れに心丈夫と申すことは父も御隣地、京都え出勤いたす事に相成りましたそれゆへ私も勇氣百倍してお伺ひいたします事は此の上の幸福はありません、それに獨りよがりかほぞんじません。が私しの一癖好きな梅暦の仇吉を演らせて頂く事は一番嬉しいのでご座います。それと同時に一番又心配と嬉しきとが、一緒になつて……卒此の上はご一同様の御批評を一重に仰ぎ上げます。

片岡我當

何んだ又来たのか……！
と言はれはしないだろうかと思ひつゝ會社のおすゝめであつかましくも亦お目通りを致します。二月に倍してご後援の程をひたすらお願ひ申します。
勘進帳の辨慶とは是れ又餘りにあつかましい出しもの。東京でもさんぐおことわりしたのですが悪くてもかまわないからやれと言ふありがたい様な有難くないようなお言葉にしたがい悪いは承知の

無茶仕坊。何をしても辨慶(勉強)時代の私だ。お目こぼしの上御見物をとかしこみぐうやまつて申す。と勘進帳もどきでおれがいます。次第。
悪口を言はれるは覺悟の上。もしおつしやれば月並のお評判記。もし亦お叱かりがなければすいなお客様、思ひやりある御評判記を地獄の上の一足飛と夜の部の佐々木程のわれらありがたき。何んのかのと無駄口は申すものゝたいく一生懸命に勤めさせて頂きます。

オールド・トーキー

五月晴一本槍

問題の「招めのすけえいが男女之助映畫」の誕生！

梨園の寵兒

市川男女之助

入社第一回主演

新入社

國友和歌子

第一回出演

新興京都撮影所全スター總動員歡迎出演

雜誌「富士」所載

土師清二 原作
石田民三 監督



梅野井秀男と語る十分間

語る人 梅野井秀男
ほのほ

(大橋孝一郎側記)



梅野井秀男のユニークな存在は關西新派の大きな魅力だ。彼の姿態から發散する艶美な妖氣には、蟲惑的な色ツボさがあり、妖しき魔藥を思はず甘美な夢の世界がある。これはまことに世相末的なスペクタクルだが、女以上の女を求むるなれば彼の存在も一ツの價値を持たねばならぬ。これは別稿の「關西新派樂屋風景」をまとめ上げる際、本誌でもお馴染みの劇評家森ほの氏と語る樂屋での彼の忙しき幕間十分間の談話である。

雪之亟の立廻りで腰が痛んで……

立廻りで腰が痛むなんて梅野井さんらしいなあ。

それよりもモルガンお雪の京言葉にはほんたうに弱りましたわ。

大阪でもやつたのぢやありませんか。

でも……京都で京言葉を使ふのは何だか厚顔ましい

様な気がしますわ、京都言葉はみんな言葉尻が下るん

ですね(二三練習して)これ

「おいきにさいなら」と云ふのが一番難かしいですね。

私も京都に來て十年以上にもなるんだが、どうしても京言葉にならない。音階が丸ツきり違ふのですね。

……江戸辯はどうです。私は廣島生れですけど矢張り江戸辯の方が樂ですね

え、それに上州辯……

變だなア、廣島生れだつたら關西の方が近い譯だかなア。

標準語だからでせうね、それに新派では大概江戸辯ですから。

だが近頃は江戸辯も追々生粹のものが聞けなくなる傾きがありますよ、地方人

が澤山入り込んで来たから
でせうね。

大阪言葉にはヤツト馴れ

た……と云ふよりどうにか
ごまかし乍らにも云へる様
になりましたが京言葉には
本當に困りましたわ。

一番好きな役柄は何です
矢張り藝者ですなえ。

新しいものを演られる
時でも藝者の役だつたらさ
う苦勞もせずにいけるでせ

う。貴方の生地のみで動
いて行けばいゝのだから……

……
——そんな譯には行きません
わ。

——さうかなア……私は貴方
だつたら無意識に或る程度
までこなせて行ける様な氣
がするんだがなア。

——でも色んなことを考へて
は工夫して行く、その間が
樂しみですなえ。

——モルガンお雪なんか貴方
の得意な藝者役だが、さつ
き云はれた様に京言葉に氣

を取られてゐるんぢやア肝
腎の芝居の方の力が殺がれ
やしませんか。

——え、それで困つてゐる
んです、どうしても臺詞の
いひ廻し方に氣を取られて

……
——私は京言葉に捉はれるこ
とは、却つてよくないと思

ひますがね……

——でも京都だけに氣がひけ
るんです。

——高橋お傳とか王妃のお白
とかいふやうな毒婦型は嫌
ひですか？

——演つてゐて面白いですけ
れど私は嫌ひですなえ。

——梅野井さんは田之助の様
な色ツボさはあつても凄味
に乏しいと思ふから、さう
云つた毒婦型は不向きかも

品ハ證デ味ノ良イ

クルリトムケル支那ノ栗

大阪新世界恵美須通り
市場 入口 角

甘栗三郎販賣部

玉井商店

ウキスデキ
 キラモンツ
 ヲルモラソ
 キュミソ
 バミソ
 ジバミソ
 滋養葡萄酒

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品
國產金鶴印



元 賣 發
横山商店

大阪市東豊後町三番地

電話東(94) 二六六二
 三〇三三
 四六四九

「母の秘密」でこの間やり
 ました。
 立役は今度の雪之丞が初
 めてごすか？
 以前に「天一坊」をやり
 ました。

「天一坊」はいゝなア……
 だが私は何と云つても梅野
 井さんの強味は喜多村君や
 河合君が持合せてゐない理
 智の閃きの無い色ツボさに
 あると思ひますから、結局
 その點を活かしたら舞臺が
 面白いと思ひますね。女の
 人が貴方の舞臺を見ると「
 いやらしい」と云ひますが

つまりそれが色ツボさ、女
 らしきがある證據とみて
 いゝ譯でせう。私はさう解
 釋してゐるのですがねえ……
 この對話の中に梅野井君はスツ
 カリ扮装を整へて立派に一人の
 女「モルガンお雪」になり終
 てしまつた。何と云ふ不可思議
 な情景だらう。正に奇術以上の
 大きな謎がこの人の周囲を取巻

關西新派劇

十七日ヨリ

名古屋

歌舞伎座出演

いてゐるのだ。開幕を報ずるべ
 ルが聞える。僕は森氏とこの妖
 しくも美しき梅野井君の部屋を
 辭したのでつた。(大橋記)



中村成太郎

東京のおみやげはなしの註文です
が第一のおみやげは私しの演出が
かした事だと思ひます。東京で
は舞臺稽古や、初日にはかならず
お客様やお友達が表の方が見物を
仕て下さつて色々の方面から注意
をして呉れますしたがつて二日目
？ 三日目には目ざわり耳ざわり
に成る個所は大抵訂正されるわけ

です（もちろん關東關西とお客様
の見ようもろがいますが）こちら
でも師匠を初め表の方も見て注意
はして下さいますが、お客様の方
では餘り無い様に思ひます。
旅から来て店子者と仕て特に氣
を付けて下さるのかも知れません
がお客様もまじつて親切に注意をし
て下さると云ふ事は實にうれしく
思ひました。舞臺のはげみも付き
ますし本當に幸福です。

次に青年歌舞伎に入座して半年
に成りますが先月から歌舞伎若人
と云ふ青年劇特有の雑誌が発行さ
れました、關西側の成駒家と共に
私も其内の一人に加つて筆を
取つて居る事もおみやげの一つで
す。是れからも東京へゆく毎度
より好いおみやげを持つてかへる
事な心がけて居ります。皆さまも
御期待下さい。

松本高麗五郎

今度は晝の部勸進帳の四天王、
梅ごよみの千葉の半次郎、夜の部
は牛盗人の友春と濱松屋のとび、
四役にて四天王の外は全部初役で
一番やりにく、心配なのは梅ごよ
みの半次郎です最近は敵役とか年
よりの役ばかりさせられつけて居
るので、こう言ふ芝居道と言ふ、
つゝころばしの二枚目がむづかし
くも有りいやでも有り見物にお氣
の毒です。何卒舞臺の私に御聲援
下さいませ。



舞臺雜誌談

蓮瀧子

先月大阪へ井上正夫先生がおみえになつてゐたので私毎日樂屋へ色々とお話を伺ひ出かけたのですが「あなたより僕が困つてゐるんだ」と云つて中々お話を聞かせては下さいませんでした。そして遂々「あなたに講義を聞きに来たのですか」といつて笑はれて了ひましたが近頃本當に舞臺のことは惱んで居ります。一體女優と云ふものは男優の方とは違つて一ツの水準まで來

れば到底擡き出られないものだといふ氣持が致します。それ以上の大物になるには餘程力と頼む指導者が必要ではないでせうか。私は藝の上では最も水谷八重子さんを尊敬致して居りますが、水谷さんも竹紫さんといふ方がなければ、今の八重子さんの地位が與へられてゐたか如何か果して疑問だと思はれるのです。水谷さんの場合だつたら竹紫さん只一人の言葉を信頼してその通り行動してをれば良かった、私などはさう云つた方のない爲にいろんな話を聞く、それに依つていろいろに氣持が左右されて行く……だからいけないのだと思ひます。

私は目下關西新派には居りますものの自分の趣味なり氣持からして如何しても新派らしい芝居が出来ないので困ります。先達でも『生きぬ仲』を演りました時でしたかお客様が少しも泣かないぢやないかと云つ

標商  録登

物名花浪

延君鮫

入北詰北橋門衛左太内ノ島區南市阪大

番一八三五〇南 電話
番二三九八四阪 内替振

堂月久 舖本館若延

て叱られたことがありましたが、元來私は融通性に乏しいとでも申すのでせうか、どんなに云はれても時代の推移からして新派と云ふものに溶け合つて行くことが出来ないう、私自身でもそんな場合たいへん弱つて了ふのです。然し自分の氣持が許さないのだから仕方がありません。

又近頃私は一度自分自身を殺してウンと臭くなり切つて終ふ、それから改めてその臭みから抜け出して行く……その結果何物か得られやしないか、そうした方がいゝのではないか、そんなにも考へてゐるのです、どうでせうか。

舞臺へ出てゐても私などは未だ未だ未だ



大槻たもつ
超非常時

「ハ、未だ參上仕りませぬ」
「ぢやネ、力彌、僕のグライダーを貸してつかはすからこのピラを大急ぎで撒いて呉れ。しかと頼んだゾ」

だし修業中でもありますのでお客様の感じに依つて芝居に不同が出来ることが自身にもハツキリ判るのでいけないことだと努力を拂つて居りますが、何しろ肝腎の腕が出来てゐないのだからどうにもなりません。舞臺を濟せて樂屋で顔を落してからでも何となく心がハツキリせずに何時までも舞臺のことを考へてゐる様な場合は、屹度、舞臺の出来も悪かつたことと思ひます。

何だか生意氣なことはかり書いて終ひましたが、只今の私は専ら舞臺戦場の氣持で懸命で御座りますので、そんな氣持が書かしたのだと何卒大目に見て下さませ。



ハママツ屋

「ヤイ／＼／＼君達は一たい何處の身内だツ」
「ハへニツのお椀が女に化ける種無し。天勝身内にちつたあ知られた辨天、力丸のお二人でござんすヨ」

神戸
モロゾフの
チョコレート

御觀劇の
御少憩に
芳しき香りと
とろりとした
舌ざわりのする
とても美味しい
モロゾフの
チョコレートを
お召上り下さい

各デパート、著名食料
品店、菓子舗にあり。

神戸 モロゾフ製菓株式會社



關西新派

本誌特寫

四月花の京都南座は最近
メキメキと好成績を収めて
る評判の良い關西新派の
京都二回目の來演だつた。
前號に掲載した家庭劇の樂
屋風景が幸ひ大受けだつた
のに斷然勇氣付けられた僕
は、引續いて關西新派の華
かな樂屋へ初日が開いて間
もない一日、例のライカを
ポケット深く忍ばせて訪問
することにしたのだつた。

ける感じその儘なので争へ
ないものだと思つた。
先づ第一に此の劇團の統
師都築文男氏の部屋を訪れ
る。と丁度御ヒイキの方な
のだらう美しいお方が二三
人で樂屋御訪問中のところ
だつた。
「樂屋風景だつたらみん
な一緒に寫すのも面白い
でせう」
と云ふ譯でこの美しい方々
が都築氏と一緒に並んで頂
いた。最初は
「あて恥しいわ」
と逃げ腰だつたが、結局み
んなこんなに澄し込んで終

つた。(寫眞・1)
その隣りが畑讓さんの
部屋。同じ部屋の山村聰氏
は、丁度舞臺の方だつたの
で畑氏だけにカメラを向け
る。
「カズラを持ちませう」
とニヤリと笑つたのだが此
の方の感じは全然俳優とは
思へない學者風な容姿があ
る。(寫眞・2)

續いて宮村松江嬢の部屋
へ訪れるのだが例に依つて
小生一寸小心なので女優さ
んの部屋へはテレルんであ
る。そして
「樂屋風景らしく」
と云ふのがこんな深刻な表
情になつて終つた。こちら
もどうやら固くなつて終つ
たぜいかも知れない。(寫
眞・3)
その隣りの部屋から筧川
武夫君が舞臺の方へ飛び出
してゆく瞬間だつたので、
あやふくひつ捉へて化粧鏡
の前へ坐つて貰つた。まだ
まだ學生氣質の抜け切らな
い氣輕さ、僕の様な若いも
のにはお話すのに打つて
付けた。(寫眞・4)
その向ひが六條奈美子さ
ん。何とニコヤカ顔ではな
いか。
「今日は屹度何かいゝ事
があるに相違ない」
と僕は睨んだ。(寫眞・5)
寫眞を撮ると直ぐお弟子
が衣裳付けにかゝると云ふ
忙しさ。
次ぎに新人瀧蓮子さんの
部屋を訪れると丁度「船虫
の唄」の扮装が出来上つた
ところ。宮村嬢や六條嬢と
は打つて變つたモダンな明
朗な女性である。そこで一
寸會話――

：：私何の役でもやつて見



たいと思ひますわ。でもやり過ぎるとテクニツクばかりが目についていやですれえ。

…花咲く樹のエマ子なぞ好きでせうね。

…エ、あんな近代的な役柄のものは大好きです。而もあれは近代的と云ふ表面的なものばかりではなく、立派な内面的な惱みを味つてゆく女だけに餘計好きです。



…舞臺で嫌なことは何です。

…殺される役の續くことですれ。前月の角座でしたか、殺される役ばかり三役も付いてゐる。ほんとうに氣味が悪くなりましたわ。これは縁起をかつぐばかりでなく、三役とも異



つた死に方を工夫しなければならぬので弱りました。

…田舎娘は演りました？

…エ、「三ツの眞珠」でやりました。でも私はどうしても強氣のものがいゝ様ですわ

…「船虫の唄」で唄を歌つてゐますれ。巧いものですよ。

…冷かしては駄目ですわでも近頃長唄を一寸嚙つてゐますの。外に三味と踊りをやつてゐますの、でもこれは内證よ。

と云つてから、瀧壱恥かしそうに一寸舌を出して見せた。

寫眞を頼むと丁度舞臺の方の出が迫つてゐたのでブルコニーで撮ることになつた。(寫眞・6)

樂屋風景

須田 寛 二

最後に關西新派の最もニユクな存在である梅野井氏の樂屋へと進む。

此處で偶然劇評家の森はのほ氏と落合つたので、早速「梅野井と語る十分間」と云ふ特輯物を作成して本誌を飾ることが出来たのでこの部屋の記事はその方で御覽を願ひたく、此處では只寫眞だけをお目に懸けることにした。(寫眞・7)

樂屋を辞して觀覽席へ戻ると早や「モルガンお雪」の舞臺は進行して、譯もなぐ觀客の涙線を刺戟してゐ



たのであつた。

座を出ると折から花見時

のこととて圓山へ圓山への足並がひきも切らず、都踊りの赤い提灯の灯が美しく軒並に續いてみえる。



澤村宗十郎系譜

紙 魚 庵

□初代澤村宗十郎（俳名 訥子、高賀）

貞享二年京都の宮家に出仕する三木若狭守の三男に生れ本名を藤吉郎と云ふ。初め初代澤村長十郎の門に入つて染山喜十郎と云ひ後澤村善五郎と名乗り享保元年十一月大阪澤村座に出勤せしが大芝居への初舞臺。

其後京阪江戸を往復して次第に名聲を高め延享四年十一月中村座にて三代目長十郎を繼ぎ、二代目團十郎と共に當時江戸兩輪の名人と稱美さる。寶曆三年十一月森田座にて助高屋高助と改め同六年一月三日享年七十二にて歿す。彼は如何なる役柄をも勤めしも、殊にその長所は和事と實事なりと云ひ傳へらる。又狂言作者としても知られ、當り藝は大星由良之助、名古屋山三、島山重忠、梅の山兵衛、油屋庄九郎等なり。

□二世澤村宗十郎（俳名 龜音、曙山、訥子）

家號を紀の國屋と呼び正徳三年に生る。歌川四郎五郎と名乗り若女方、立役等務むる内、初代に見出され、寛延二年九月その養子となりて二代目を襲名す。寶曆六年以降は専ら實惡を勤め明和七年八月晦日五十八才にて歿す。當り藝は十郎、小野道風、意久、工藤、能坂等なり。

□三世澤村宗十郎（俳名 遮莫、曙山、訥子）

二代目の次男として寶曆三年に生る。幼名を澤村田之助と云ひ寶曆九年十一月中村座が初舞臺。明和八年十一月三榭座で元服して三代目を襲名して立役となる。後東西の各座を往復して江戸立役者の重鎮となり、享和元年三月二十九日四十九才にて歿す。當り役は名古屋山三、十郎、紙屋治兵衛、忠信、由兵衛等にて就中大星由良之助は古今を通じて比類なしと云はる。

□四世澤村宗十郎（俳名 遮莫、曙山、訥子）

三代目の長男として天明四年に生る。文化八年十一月市村座にて四代目襲名。文化九年十二月八日二十九才にて歿。

□五世澤村宗十郎（俳名 訥升、高賀）

享和二年生れにて父は市村座附茶屋泉屋の出方。幼時四代目の門に入り源平と名乗り文化四年十一月の市村座が初舞臺。同十四年二代目源之助を繼ぎ立役となる。天保元年「千本櫻」の七役、「忠臣藏」の十一役を勤めて大喝采を博す。翌二年十一月同座にて訥升と改め、更に弘化元年七月市村座にて五代目を襲名す。

その後長十郎、高助と改名せしも嘉永六年十一月十五日五十二才にて歿す。

□六代目澤村宗十郎（俳名 高賀）

本名を澤村福藏と云ひ明治八年十二月三十日京橋新富町に生る。五代目の孫にて四代目高助の養子。明治十四年十一月久松座で四代目源平と名乗り初舞臺。同四十四年九月歌舞伎座で荻萱を勤めて六代目宗十郎を襲名す。

× × ×

サラ イム
ソイ タ
果實 シロ
コヒ シロ
乳酸 シロ
其 他 洋酒 食料
ア イ ス ク リ ム

製 造 販 賣

松竹各劇場御用達

吉 村 商 會

大阪市浪速區

新川二丁目六六七

電話(76)七二六番

型の研究・其の三

勸進帳「辨慶の型」

—その一—

編輯部編



扮 装

へ海浦の浦に着きにけり

『ヤアレ暫く御待候へ』

これは由々しき御大事にて候……………

撫附臺、兜巾、篠掛、翁格子の着付、金にて梵字を織出したる水衣、輪縫の織模様ある白の大口、腰帶、小刀、白足袋、右の手に中啓、左手に珠敷を二つに疊んで下げたる拵へ。

揚幕より出で花道で義經に一禮の後義經と斜向合ひの正面となる。

謡がゝりに重く云ふ。

立上つた四天王が座つてから云ふ。

……御痛はしくは候へども……

……御笠を深々……
へいざ通らんと旅衣關のこなたに立ちかゝる

『如何に申候これなる山伏の御關を……』

『……堅く通路なり難し』

『して其趣意は』

軽く義經に一禮。

重く云ふ

義經及び四天王が花道の西際へ寄つて裏向きとなるので辨慶は其の後を通抜けて舞臺へ行く。義經の舞臺に於ける位置が定つてから舞臺真中の稍下手で斜に上手向に立身の形で云ふ。

上手向きになり突込んで云ふ。

「さん候ふ……」

「さてその切つたる山伏
首は判官どのか」

「ア、ラむづかして問答
無益一人も通すこと
罷りならぬ」

「言語同斷……」

此上は力及ばず……

心得て候」

「イデイデ最後の勤めを
なさん」

(チンチンツンツン……)

ハそれ山伏といつば彼の
優婆塞の行儀を受け……

富樫正面になると辨慶も正面に
なつて極る。

意氣込んだ形に右の足から廻し
て稍後向になる位の形になる。

富樫のこの臺詞に辨慶と正面に
向合ふ。

番卒のこの臺詞が終つて富樫が
元の位置葛桶に掛ると辨慶は静

かに右の足から戻して元の形で
少し下手の方へ斜となり臺詞。

強くしつかり云ふ。

歎息の心で云ふ。

正面に直り一寸富樫へ思入れ。

合の手になつてから珠數を一寸
摩つて右へ廻つて後見座へ行く
と四天王は前へ出て四菩薩の位
置に住ひ義経は後見座の前へ下
つて裏向きとなる。

辨慶右に珠數を持ち左で袖を押
へ能の構へで四人の眞中へ直り

即心即佛の本體を……

……こゝにて打留め給は
ん事……

……明王の照覽測り難う

……

……熊野權現の御爵あた
らん事……

……立ち所に於て疑ひあ
るべからず……

……俺あびら呷けん……

……珠數さらさらと押し
揉んだり

「勸進帳を讀めと候や」

右の足を前から圓く引き左の足
を摺出した儘伸し右の膝を折つ
てその膝を突く時に大口の腰の
上を一寸押へる。

右、左と袖を見る。

右手の珠數を肩のあたりから打
下す形をする。

下から上を見上げる。

左の手を開いて上へ向け、右の
手は珠數を持つたなりに左と同
じに上げて拜する形。

右手を引いて左手を前へ構へ首
と互ひ違ひに左から三度イヤイ
ヤをする。

立上り右足を引きトンと踏でか
ら兩手を拜む様に合せて上から
下へ二度計り揉み下し

束に立つて正面に向き仰向き勝
ちに眼を閉ぢ珠數をかけた兩手
を胸の邊で合せて極る。

驚いて眼を開く。

(次號へ續く)

辰巳と島田

菱田正男

澤田正二郎が歿してもう七年になる、つひ最近のやうに思はれるが、この間東京で故人を偲ぶ夕が催されたと聞いて今更に月日の経つのは早いものだと思つた。

その不出世の劇界の先驅者の大きな遺物の「新國劇」は生前自らのすべてを打ち込んだものだけに、その遺物の將來こそ刮目して見るべきものがあらう、澤田が死んだ直後、劇界では誰もが話題に上らせたのは「新國劇はもう駄目だ」「近々解散するだらう」といふことで、十人の中九人までもが抱いたに相違ない、小太夫やいろんな人の出入りがはげしくなつた、ますます前途に不安を感じずにはゐられないことが多かつた——

それから數年！新國劇はあらゆる迫筆と戦ひ、いろんな難關を美事にパスして、辰巳、島田を擁して立ち直つた、われわれはその甦生した新國劇の現在の姿を見てこそはじめて地下の

澤田も微笑んだことであらうと思つてゐる。

その間の危惧、不安、焦躁、あらゆる氣持の錯綜した中に、采配を振つてゐた依藤理事の辛勞も一方でなかつたらうし、久松、野村らの先輩連の熱意も今日の新國劇の發展から見て忘れられない偉大な功勞者である。

それらの先輩連の不屈の精神によつて育つてくれ「澤田二世」と自他ともに許す辰巳、島田の兩優の今後の活躍こそ當に新國劇フアンのみならず、劇界の人々がひとしく注目してゐるところであらう。

國定忠治に、坂本龍馬に、井伊大老に澤田をうつす辰巳、芥掛時次郎に、白野辨十郎に澤田を偲ばす島田、いづれ劣らぬ進境は涙ぐましいものがある、「澤田の無理眞似」など、嘲笑されてゐた二人も今日では立派に各々の藝を生かしてゐる、澤田の歿した頃「俺達二人が巧かつたらなア」と手を握り合つて泣いたといふ二人が今日新國劇をその双肩に擔つて故座長の靈を慰め、多難な劇界にめざましい活躍をつゞけてゐるのは全く熱であり、努力の結晶だ、二人とも若いだけに前途に燃えるやうな理想をもつてやつてゐるやうし、それだけ新國劇の前途は多幸と謂へる、殊に最近二人とも老け役をやり「號外五圓五十錢」や「炭燒の烟り」などで又新たな境地を拓いた、この老役に

は贅否區々で、相當劇壇の話題となつた結果、島田だつたか「今後はお役をやらない」といつたとか傳へられたが、われわれは老後も時折見せてほしいと思ふ「若いから味が出ない」といふことは演者の謙遜であり、評者の常石だ、そうしにことに拘泥する必要はない、出来ると思つたことには多少の冒険は伴ふとも敢然演ることだ。

また島田がこの程大阪浪花座で六代目の當り狂言「一本刀土俵入」を演じた、自分はいろんな用事のためとう／＼見られなかつたが、非常な好評だつたといふ、もつとも作者長谷川伸氏が「島田なる出来る」と確信して上演させたといふ折紙つきだけに作者の眼も狂はなかつたし、演者島田も大いに面目を施こしたわけだ、これなど島田の不斷の勉強の賜物だ、同時に長谷川さんは「臉の母」で「數々の俳優の中で島田のそれを見てゐると一番泣かされる」と賞揚し、「新國劇以外は御免だ」と聲明したとやら、これなど長谷川氏の感激性を語るものであり、一面島田の巧さを裏書してゐる。

一方辰巳に就て最近感じたことは曩頃大阪歌舞伎座で「海援隊」が出た時、自分の見た日は辰巳が「海援隊」の大詰前で病を押しての力闘に遂にブツ倒れた時だつた。この日の辰巳は最初の出からまるで元氣が無かつた、大儀さうに身體を運び、どことなく物憂い臺詞が氣がかりだつた、殊に大詰の一幕前で、

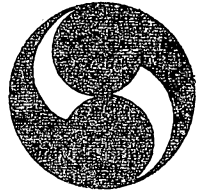
長島のお龍に戯れるところなど見てゐてヒヤ／＼する位危ない腰つきだつた、果して大詰となると、久松をはじめ皆がスラリと舞臺に並んで、谷屋充氏が聲演とともに下る悲壯な「辰巳休演」の口上を述べた、恰度その日は島田も病氣休演中であつたが場内は大入満員で、全観客はこの口上に一しきり猛烈な拍手を浴びせたのは、この劇團にならでは見られない光景だと胸を痛くしつゝ見てゐた。

「斃れて後止む」の悲壯な新國劇スピリットの現はれであり、亡き澤田が「いづこやらで囃子の聲す耳の患」の一句をのこして安らかに眠るまで「舞臺戰場」の雄々しい覺悟で頑張りつづけてゐたことを憶出し辰巳の倒れるまでの熱演に更に新らしい感激を覺へた、しかもその坂本龍馬が京都での澤田の最後の舞臺であつただけ一層その感を深うしたわけである。

(同時にその際代役に些かの不自由も感じなかつた新國劇の平素の訓練のよさを見せられて感心したことも忘れられないことだつた。)

こうした恵まれた周囲に育つて、いろんら藝域の開拓につとめつゝ勵む二人の幸福を喜びたい。

お互ひ同志仲睦まじく、互ひに鞭撻し合つて、更によき俳優として、亡き澤田の大きな遺物々新國劇々と共にグン／＼仲びて行くことを心から祈りたい。(十一、四、廿四)



忠臣藏ナンセンヌ

「忠臣藏」は上演される數も多し爲もあるのか、或は何かの廻り合はせなのか、舞臺の上の失敗や笑話がかなり多い。

五段目の猪が寝ぼけて四段目の判官切腹の最中へ飛び出して、肝腎な芝居を滅茶苦茶にしたといふ古い噺や、素人芝居の定九郎が大小を忘れて出て、舞臺でそれと氣が付き、「大小々々」と後見に言ふとお囃子が錯覺を起して大小——大太鼓と小太鼓を入れ

るので、定九郎が愈々狼狽するといふ茶番？もある。(これを故人の伊井峯一座で演つたことがある)私も爰に見た處、聞いた處を二ツ三ツ御披露しよう。

◆血を吐かぬ定九郎

定九郎が二ツ玉に當つてノリ紅を口から吐く代りに墨を吐いたので定九郎が烏賊に化けた！と冷笑されたといふ話もあるやうだが、私の友人の定九郎は舞臺では遂に血を吐かず、もがき死に死んでしまつた。その代り、この役者が樂屋へ戻つてヤレヤレと思つて、アーと溜息を突くと同時に、ガラガラと口からノリ紅を吐いたので、側に居合はした者の方がビツクリして青くなつた。

此笑話の前にもう一場ある——といふのが、元來「忠臣藏」で勘平や定九郎は誰しも買つて出たい役である。勘平は無論好い役だが相當むづかしい。定九郎の方はお白粉を全身に塗つた上に黒羽二重の單衣を素肌に着、朱鞘の大小五十日鬘といふのだから、拵へも好いが、出る間も短かく巧くやれば舞臺を凌つて行ける役である。劇評家の〇氏は商賣柄この役へ始めから目を付けてゐた。併し自分からそれを演りたいと言ひ出しかねたので、定九郎といふ役は體のスウツとした、むき出しになつた足のホツソリした人でなければ向かないものだとそれとなく遠廻しに、自分へ役が来るやうに心の中で祈つてゐた。併し、その定九郎は

遂に畫家の丁氏が演ることになつた。が、彼氏の足たるやその肥満した體に比例した、かなり細かなかつた定九郎——血を吐かなかつた定九郎——それはウムムと兩手を握り締めて唸つただけで、遂に口を開けなかつたからタラタラとノリ紅が口から出る筈がなかつたのだが——その定九郎こそ今言つた細からぬ足の持ち主なのである。

◆物言ふ猪

五段目の猪の失敗は前にも述べたが、私が勘平を演つた時の猪君はチヨボ床へ飛び込んで、太夫と三味線とを驚かした。猪君はその時が初舞臺テンテレックで車輪に花道を飛び出すと、舞臺へ來てグルグルと廻つて見せた。それま

ではいいが、それが爲に目が廻つて、見當はづれのチヨポ床へ飛び込んだのだ。本當の舞臺でチヨポ床へ飛込むことはないが、素人芝居のことでチヨポ床が低い爲に、威勢よく飛び込めたのである。

ビタ(田舎廻り)の芝居だと、この猪が口をきくから振つてゐる。例のテンテレッツクで猪が飛び出すと、七三へ来て立留り「向うに見えるあの松の木、どれ一ぶくやつて行くべいか」といふ様なセリフがあるのださうである。私は嘘ツパチな、拵へ噺だらうと思つてゐたが、田舎廻りをやつたことのある友人に聞くとそれは本當だと教へてくれた

◆しかる勘平

おかる勘平でなく、しかる

勘平といふお話——この開亡くなつた秀調の失敗談である。羽左衛門が中州の眞砂座か、浅草の宮戸座かで勘平を演つた時のことである。秀調は千崎彌五郎を演つてゐた。勘平切腹の前の處——「こりや勘平、それへ出え」のセリフがキツバリあらうといふ千崎の見せ處、それをどうしたものか、「こりや千崎」と言つてしまつた。羽左衛門の勘平がうつ向いたまゝで、「千崎は手前ちやねえか」と叱ると、秀調君カツとのぼせて、「イヤサ彌五郎!」羽左衛門舌打して、「何を言つてやがる!」

◆二つ玉に當つた歌六
吉右衛門の父の歌六老人はかなり笑話を残してゐる優だが、左團次が内藏之助を本郷

座で演つた時である。大話に兩國橋の引上げが出た。歌六老も堀部彌兵衛で義士の中に居てゐたが、名宣り上げるだけのつまらぬ役であつた爲だらう「堀部彌兵衛」までを大きく言ふと、例の癖の鼻を一つ掌でこすり上げて、「金丸」と名宣る處を「カナマ〇」と早口で言つてのけた。それが毎日で、毎日言ふ事が變つてゐた。丁度その次にゐた壽美藏君が笑ひ易い優なので、續いて自分の名宣り上げるのに困り抜いたさうである。

この老人にもう一つ、忠臣藏に縁のある笑話がある——役が濟んで樂屋風呂へ這入つてゐると、その頃は幹部も下廻りも一つ風呂の時代で、灯も薄暗いので、歌六が居ると

は知らず、後から這入つて来た下廻りの一人が、誰憚らず心持よく一發放した。歌六は思はず「臭い」と言ふと「もう一つやつてやらうか」と、直ぐまた、いと物凄いのをブツと放つた。歌六老は憤然として風呂を出ると、直ぐにその下廻りを自分の部屋へ呼び付けた「お前か、今風呂場で二ツ玉を放したんは」と頭から怒鳴つた。下廻りは一所に這入つてゐたのが播磨屋の親方だと始めて知つて、縮み上つた。親方はぶちのめすつもりでゐたのが、ふと堪らなく可笑しくなつた。そして笑を耐へながら言つた。「それにしても強薬やつたなあ」と。

お話が段々下の方へ下つて来たから、これで止めて置く

森ほのほ

異 つ た 二 人

— 我當・勘彌の期待 —

岡 田 孤 煙

「我當、勘彌」への期待——といふのが自分に與へられた題だが自分としては可成久しい以前からこの兩優に期待を持った居たのである。我當が未だ千代之助を名乗つて有樂座に片岡少年俳優一座の座頭として光つて（勿論父親仁左衛門の七光を浴びてだが）居た少年時代から、勘彌が玉三郎の藝名で帝劇に故梅幸の次男泰次郎と子供に雙壁として賞讃されて居た頃から、自分はひそかに兩優の將來に期待をかけて居たと云つてもよいのである。

我當は正直に云つて人氣のある俳優ではなかつた、千代之助の少年時代は未だしも、我當襲名頃からの彼は不人氣も甚しく、大根呼ばはりをされて、劇評でもいつも叱られてばかり居た。仁左衛門の御曹子たる我當と歌右衛門の御曹子たる故福助とを比較すると、地位、門閥、年配、同じやうな境遇に在りながら兩優の人氣の相違は

全く隔絶して居たのである。これは一つには彼の父仁左衛門にも責任のある事で、仁左衛門が餘りにも我が子を溺愛して、配役其の他の事に就いて常に頑に我意を通さうとした結果、幕内でも反感が作我當にそゝがるゝに至つたのである。我當に取つて、父の愛は有難かつたであらうが、又それが仇となつて、人知れず苦しみ煩悶した事もあつたに相違ない。

我當が不人氣であつたに拘はらず自分は彼に期待を持ち續けて來た。平山蘆江氏なども我當推賛者の一人で、早くから我當に期待されて居たやうである。イヤ期待ばかりではなく、我當の爲めに研究会を作つたり指導したりされた程である。自分が少年時代から彼の將來に期待したのは彼の人格（人間性）のよさと舞臺に眞面目で熱のある點であつたが研究心のつよいことも自分の注意を惹いたのである。

仁左衛門は眼にも入れない程に作を愛したが而かも藝に關しては嚴格な師匠であつた。我當は父から歌舞伎に演出を厳しく教へらるゝとともに新しい演劇の研究も自ら怠らなかつたのである。仁左衛門の死後我當は一層苦しい立場に置かれた。だが、彼の忍従的な勉強と研究的な努力とはやがて彼を人氣の水平線上に引上げ、其の將來への期待を確實ならしめたのである。

勘彌の場合は我當とは全く途を異にして居る。勘彌は少年時代から惻愍な性質で彼の舞臺はいつちもキビ／＼しく明快であつた。齒切れのよい調子すつきりした容姿、そして聰明な頭腦と圖太い舞臺度胸——俳優として申し分のない素質に恵まれた勘彌は幸福な男である。（但し理解ある唯一の指導者先代勘彌に早く別れた事と貧乏とは彼を不幸にしたけれど）彼は舊劇によく又新劇によい。引受けた

役は、何んな役でも相應にこなす度胸（自信）と手腕とを持つて居る。彼の人氣は舞臺に於ける熱と共にすんぐ上昇してゆくのも當然である。勘彌は血のつながらとは云へ、先代勘彌に生き寫して居る。又一面羽左衛門にもよく似て居ると云はれて居る。（本人も自ら羽左の後繼者を以て任じて居るであらう）たゞ彼の舞臺の缺點はやゝこせ／＼した感を懐かしめる事だ。小伶俐になり過ぎる嫌ひがある。もつと大器たるの修養が大切である。

我當にしる、勘彌にしる其の舞臺には先代寫し（所謂父親そっくり）の點が露骨にみえる。一部分の人はこれを極端に排斥して嫌ふが、この先代寫しは必ずしも排斥ばかりするものではなく、修業中にあつてはこれが大いに役立つ事があるのである。勿論模倣よりは創造（工夫）が大切だが、模倣なしに直ちに工夫に入る事は難かし

い。書法でも書法でも修業時代には透き寫しが許されて居る。寧ろ段階としては踏まなければならぬ。歌舞伎の演技にしてもよい手本を信ずれば親が子にこれを習はせ、子がそれを透き寫しにして勉強する時代があつてもよいのである。たゞその透き寫しが手本以外の悪癖まで描寫する必要の無いのは云ふまでもない。（此の點で扇

雀の鴈治郎の透き寫しはモット正確に矯正さる可きであらう。）

然し我當も勘彌も既に壯年期に入つて居る。そろ／＼透き寫し時代から脱却してもいゝ頃だ。

歌舞伎の新人として期待にそむかず独自の途を拓いて、力強く、歩き出して貰ひたいものだ。

（二一、四、三〇）

繁華街に近く、交通至便

閑雅な和洋室！

◇モダン階上浴室新設◇

南地ホニール

一宿一
二圓半
額半

南地戎橋電停前

電話南四一四・四四一

演劇 “堀頓道” 雜誌

月極め御購讀下さい

中座と浪花座

秋月好光

芝居の大敵花時と廓の踊りの眞つ只中で開けた四月の各劇場は、思ひきや去りやらぬ春寒と、その上頻々として雨の音づれがあつた爲、初め案じた程悪い成績ではなかつたとの事である。

この香しからぬ月に魁車を中心に小人數の一座で然も耳狎れぬ通し狂言や新作物を本位にした中座の膳立てをみた時、誰しも一應は危ぶむでみるのが當然だらう。グツと大衆本位にレベルを引下げた

所も四月の芝居なら文句は云へない。御大新駒家が奮闘の甲斐あつて興行成績も吉の部と云ふから關西劇場の孤壘を死守した勞を多としなければならぬ。

道頓堀で三十何年振りとかの珍らしい狂言肥後の駒下駄は、以前青年歌舞伎で扇雀の善九郎秀郎の縫之助で演つた事がある。但しこれは京都の歌舞伎座で大阪へ持つて行つたか何うかそれは知らない理窟抜きに嫉しめる芝居で、今の常識か

ら考へてさ程不合理な所も無く、意屈で見てゐられぬと云つた歌舞伎風のだけ場もないので、あの程度にカットするなら今日埋れた通し狂言でまだ大衆向きの面白い芝居が外にもある筈だと思ふ。つなぎ囃子の賑やかさに浸つてゐるといかに昔の世話狂言を見てゐるやうなのんびりとした気分が味はえて嬉しかつた。壽三郎の善九郎は思ひつめた一本氣な所は出てゐたがこの種の役に不可欠な和かさ潤ほひと云つた風が全で出てゐない。これはこの人の持前だから仕方がないがこゝで愛嬌や色氣がなくてはこの頃の大衆小説の主人公向井某になつてしまふ。好漢餘り生真面目に力演しすぎた憾が残る。魁車の縫之助は追がに心得たもので何處やら大成駒家のそれを偲はせるやうな風格もあつて、至極應暢に要所々々を引きしめて見せてゐた。その他では市藏の刑部、箱登羅の用人と云つた所が、何

と云つても年功のお蔭で巧まずしてかうした芝居の中の人間になりきつてゐた。

長三郎段猿と云つた年輩の人にはまだこの芝居に同化して行くだけの味があるが次の若手になつてくると何となく、サバ／＼して溶け合はない味を感じさゝれるのは是非がない。

次に戻り橋と小唄振りがあるが、前者は何となく間に合せと云つた所があつて魁車の體に疲れが見へ、壽三郎の綱もこの種の大まかな新作劇にこの人を使ふのは恰はしくない。どつと落ちたる北野の廻廊で出乗りがないので終りが引立たず従つて鬼の飛去りも何だか玉藻前と云つた感じがした。小唄振りは時汐に投じて好評だつたが、元來四疊半向きの小味な爪弾きで低稱すべき物を山臺に使用して衣装をつけ道具迄造つて振事化さうとするのは少し儻山すぎる。お道樂として一度は結構であるが、同じ凝るならもつと

本格的な自分の爲事に凝るやう若手の諸君に希望したい。

最後の屋根の聲は例によつて長谷川伸氏の味が善悪共に濃く出てゐる。何でも無ささうに見へて實に巧い序幕の書き方に敬服するが、餘りに我子に拗し過ぎる主人公の氣持にいつもの嫌りなきを感じる。錦山と新藏が屋根の上で死んだまゝ幕になつてそれで打出されると何うも後の氣持に救ひが無くてやりきれない。斯様な並べ方はもつと考へ直してほしい。この脚本は魁車が自分で擇んだものだけに相當自信のある藝を見せてゐた。事實今度のだし物で見答えるのはこれが第一だつた。これを皮きりに今度は俳優に自己の演し物を選ばせる事を折柄新制の松竹内閣へ提議したい。

浪花座は辰巳病休で島田一人を中心に二の替り迄出して前後六つの演し物に主演の連続とは勇ましい。將に島田正吾全

コスビコリグ

大阪市東區南新町貳丁目壹番地

丹陽堂合名會社 製菓問屋

電話七五七番・番二六七三番・番五〇一五五番

集大衆版と云つた所だ。更らに五月へ打越すと云ふから新國劇の根強い人氣に今更ら乍ら驚かされる。

所でお眼見得の三つの演し物の内問題は何と云つても一本刀土俵入りだ。作者の曰くつきであるだけに一同仲々念入りにやつてゐる。


菊五郎のをみてから餘程経つので委しい比較は致し兼ねるが、柄に無いと思つてゐた前半が却つて良く、後半に到つていつもの島田以外に變つた所がなかつたのはむしろ意外だつた。あびこ屋の提燈に頭を打つてよろける所や、渡し場で竹の皮の飯粒を踏みつける所等工風したものだつた。彌八に頭突きを持つて行く所は追がに菊五郎のは角力そのまゝの型になつてゐたし、よろけてギバに落ちる所も踊りで多年叩き込んだ菊五郎の動作と若い島田のそれを同日に論するのは無

理だらう。後半の變貌が餘りスッキリし過ぎてゐたのでイタにつきすぎたいつもの股旅物から脱けきつてゐない。とにかく後半に今一息の工風を所望したいと思ふ。

久松の酌婦はこの人としてはさして大役と云ふ程でもない。充分にこなしきつてゐたやうだ。

島田の表現に一點の疑問が残るのは駒形茂兵衛は果してお蔦を單なる恩人としてのみ求めてゐたのか、それとも別の思慕があつたのかと云ふ點である。これは作者へ提出すべき疑問であるかも知れないが……。

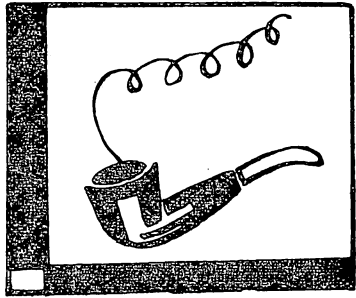
その他上海、二死滿壘、何れも安易すぎて新國劇の突進的な新鮮味を見る事ができない。



ルビビサル

説明 内容

社 会 式 酒 本 日 大



劇團の變轉と 私の女房役 (7)

都 築 文 男

門脇陽一郎の吾が宿舍喜代元旅館訪問によつて乃木劇の創立はトントン拍子に具體化した。

淡路島を一望の中に含む垂水の高地に五萬坪の敷地は既に町民から献納され、五間道路で延々二里の參道の計畫で乃木寺が建立される。その乃木寺の本尊は佐々木高綱が頼朝公より拜領したと傳へられる不動尊、その尊像は日露戦役當時有名な某僧侶が戰場へ携行し二〇三高地陥落當時決死の兵卒に不

動の精神を説いて、安らかに笑つて戦死せしめたと云ふ曰くつき。乃木寺大伽藍奥の院には歴代の御陵をも安置し奉り本殿の左右には神代以來の殉國の志士十幾萬の靈をも祭壇し關西の靖國神社たらしめんとする爲の基金募集これが乃木劇創立の目的である。加へて四月には天覽の榮を賜はり、高位高官の台覽は勿論の事である。俳優としての最高榮譽とも云ふべき天覽、我々にとつて拵み得ぬ強い魅力

である。やがて資金調達に走奔し、一方主意に賛同された安房主事、乃木寺住職某、就中田村憲兵大尉から金一萬圓が請負師佐々木某に託されて假建築事務所費に消費された、上演の隣には乃木婦人會、國防婦人會、在郷軍人會消防組、佛教園等あらゆる右翼團體の前賣切符が約束される、各地方官、警察署も後援しようとのとてもいい前景氣。

愈々大阪清水町某寺院にて一座俳優小織、都築、山田好良、岡本五郎、荒尾誠一、富本民平、女優では玉木光子野島左喜子、他數名の幹部俳優の決定を見て稽古にかゝつた。門脇氏の脚色にて生立篇、青年篇、殉死篇の三部曲に編成され、時恰も滿洲事變直後、上海にて風雲を孕んでゐる折から、特に山田一等兵を劇化して滿洲篇と附加して四部曲となつた。

正月の初演を所も、忠臣楠公の靈魂を安置し奉る湊川神社前の千代に壽くハ千代座を借受けて手興行として縁起の良い蓋開けた。

然るに突如内閣の更迭が惹起し地方官、官衛關係の後援は一頓坐を來した加へて門脇氏の同縣人で太夫元である加納某氏から出るべき筈の資金一萬圓が都合で出なくなつてしまつた。併し我々初念飽まで挫けず、加はふるに小屋の大道具も完成し、稽古も順調に運んだ今日、一座俳優にも押迫る師走の空に破約も成らず、小織氏と自分は血眼になつて資金調達に走奔し、やつと神戸の篤志家玉越某氏より三千圓の融通を受けた。

斯くの如き事情で正月興行だが俳優裏方には半月分の給金しか渡せなかつた。小屋費用前納資金は田村氏が義侠的に出資されて、覺束なくも開演の運

びとなつた。

ここに於て私は、大部屋に全座員を集合せしめ淳々として愛國心を説き、まして天覽に浴する事、半給金で申譯ない事だが、俳優としては唯一の報國の道である事を涙をふるつて述べた。場内はシンとして語るも涙、聞くも涙

——一魂となつたこの結束こそ成功を齎らすのだと飽迄信念を捨てず、昭和七年一月元旦、湊川神社に禮拜沐浴して記念撮影などもして蓋を開けた。が客は來ない。勿論劇場は不利な場所でもあり、當時人々の思想は乃木寺建立よりも先づ滿洲に活躍する兵士の慰安に傾いてゐたが、——結局神戸の半月は不入に終り小屋入費旅舍雜用費も拂へず、上り高はすつかり玉越氏に返済する始末、又々田村大尉より一千二百圓を煩はし廣島、岡山の興行主より送附し來る五百圓宛をも興行資金として

神戸の一部支拂を濟まし、次興行より小織、都築、門脇の三人が太夫元となつて岡山に乘込んだが不幸にも是又不入。廣島も同じく不入。呉も同様。不止得書間小學生に十錢で軍神乃木劇を見せるといふ状態、最後(缺損の爲止むを得ず)の柞州津山打上の夜、岡山の某劇場主が小織、都築を入質にし、衣裳、鬘をも差押へするとの噂を聞き込み汽車に乗つては捕まる怖れがあるので津山より乗合バス、トラツクに俳優も荷物類も全部乗せ汽車に乘らずして命カラウ、神戸へ歸る事が出來た。僅か一ヶ月餘の間に太夫元としての自分と小織氏は借財五千圓の大祟りとなつた。

時、東京金龍館の飯田氏より招聘を受けた、その若干の前金を以て乃木劇一座員及裏方一同に涙金を別つ事が出來た。

小織氏と私は早速東上、三月一日初日で勝敗(菊池寛)二筋道(故瀬戸英一)月唄で御目見得。一座は小織都築の他は近江二郎、岡本五郎、山田(好)荒尾、富本、女房役として現一座の宮村松江、河村美代子、橘花枝、高根百合子、深山百合子、藤田姉妹等であつた。然るに小織氏は乃木劇に全力を傾け盡した疲労からか急に病を得て倒れた。されど二の替りには當時世想を沸騰せしめた「爆弾三勇士」を劇化上演するに及んで俄然淺草興行街を搖がし、日延べ又日延べで上演回数八十數回に及ぶ。五月歸神の折、小織氏の病氣回復を機に中旬から新守座で蓋を開けた、女房役は中京隨一の人氣者、松尾志乃武氏狂言は假名屋小梅、好評裡に打上げ、六月休演して七月多年宿望の獨立劇團の機会來り、自分の地元神戸の在住俳優のみで結成して名も扇港

劇場、一座には小笠原茂夫、歌舞伎畑の實川延童、中村小福、女房役として三好榮子、六條奈美子等で旗擧した、八月休んで九月には筒井徳二郎、明石縁郎、小松孝子等の加入を得た。その年は巡業などで過し、昭和八年

一月再び松竹に迎へられ、自分に熊谷武雄、筒井徳二郎、武村新、山田好良、桃宮春陽それに映畫で人氣を賣つた河部五郎を加へ、女房役に富士野葛枝、和歌浦糸子等で正月興行を名古屋御園座で開演し一宮、岐阜を打つて下半月を神戸で打つたが一座の不統制の爲一ヶ月で一時頓坐した。

二月三月の餘暇、新守座より迎へられる儘に、都築、熊谷、松尾、山田九州男と名古屋では超努絨の合同劇で新愛知の連載小説「泥濘の道」を上演して續演亦續演の好評を博した。四月愈々好劇ファンの待望に乗り再

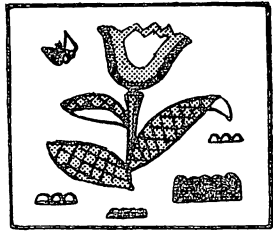
び松竹關西新派劇の改組、都築、熊谷阿部の他に映畫で嫵艶を謳はれた梅村蓉子を女房役に加へて角座に蓋を開け「島の娘」「八百屋お七」「松風村雨」「地雷火組」で俄然人氣沸騰。これがそも、現在三ヶ年繼續、角座に於て一ヶ年打越しの超記録を残した、都築山口、中田、梅野井による關西新派劇の素因になつたのであると思はれる。

現在、私と梅野井氏とのコンビに於いては喋々を要しますまい、始めて梅野井氏と顔を合はせ、引いては現劇團の原素となつた名古屋歌舞伎座興行の話もあるのですが、稿数の都合上、執

れ日を改めて、
永らく御退屈さま。

(をわり)

永らく御愛讀を賜つた都築丈の連載物も本稿を以て終りでござります。



梅玉と延若、壽三郎

高安吸江

梅玉、壽三郎、延若とこう三巨頭へ一度に話しかけるのは中大變で、到底一々こと細かに述べたてゝるわけには参りかねますから、先づ大體のことにしておきます。

正月の忠臣藏以來東上した梅玉、延若兩人はまだ道頓堀へ顔を出しません。延若は是までかう大分馴染も出来てゐますから兎も角として、梅玉が鴈治郎の女房役としてゞなく單獨で上京したのは恐らく今度が始でしやう。

元來が溫和で、すべてを内輪／＼にと努めてゐる様な優の藝風が、どこまで東京人に理解されたか、人形の方にしても文五郎の微妙な技巧はわかつて、榮三の腹藝はわかり兼ねた東京人に、表面はベアツとしてゐる様で、其實中々細かい處に巧い味をもつてゐる高砂家の美點が實際わかつたのであらふか、甚懸念に堪えないのです。

此間の顔世御前にしても、龍頭の兜を見せられ、始めつづ

ぐ眺めてからそれらしく思ふ表情のうちに名香をきいて、いよ／＼それと背く氣持など、極めて自然で何等の誇張もなければまたそれを人に見せやうとする當テ氣も見られぬといふ行き方で、女形として此優の藝も随分洗練されたものであると敬服させられました。が、そこまで見てくれる見物は恐らく此地でもあまり澤山なさそうですから、況して馴染の薄い東京では猶更のことゝ察せられます。

それはとにかくとして梅玉が特色ある女形として動かすべからざる位置を占めてゐるのは事實ですが、唯遺憾なのはあまりに淋しい、あまりに陰氣である事で、此れを補ふ爲めにはどうしても花やかな人を其相手にあてがはねばならぬ。それには恰度延若かをります。

河内家が強い精力家で、何んな役でも演りこなせないものはないと人も思ひ、優自身にも然う信じてゐる位に器用な役者で

あることは一般に知れ渡つてゐます。併しまたそのあまりに廣い間口が災して或局部へ深く齧り下げる力に充分でない憾みがある。先年の病氣以來、そして其後も時々惱んでゐる痼疾のせいかも知れぬが、最近は多少自重する模様も見え、其結果か以前に比べて大分底力のある演出も見受けられるやうになつたのは喜ばしいことです。どうか此後ともに一層此點に留意してほしいと思ひます。

それで此派手で陽氣な延若に配するに、陰氣で小心な梅玉を以てするのですが、例へば長右衛門にお絹、八郎兵衛にお妻、金藤次に萩の方、鐵山にお菊、大膳に雪姫など、かげばいくらでもあります。しかし扱となるとあんまり是といふものも無いもので、實際女形は損の卦です。ですからやはり柄相當の新作を求めねばなりません。それも是迄時々試みられたやうに單純な賢女型、春日局とか細川忠興の妻などでは最早大した効果は得られまい。此間角座で奴の小萬が出てゐました。あれは極大衆向きの劍劇でしたが、こうした小萬のやうな女俠にして、意地を立て通した強い一面と共に、女としての自己を顧みたる時の淋し味を描けば、何か一寸したものでも出来るかも知れません。

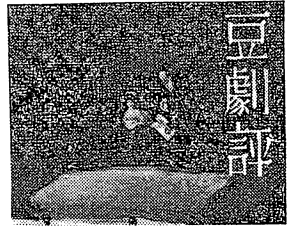
新作となればどうしても壽三郎を使ふのが得策でしやう。歌

舞伎劇としてはあまりに無技巧と見える優の演技が、新作となると眞向きにあてはまるのも妙です。それで此れまでから梅玉相手の新作でいろ／＼と面白いものを見せてくれましたのは洵に結構なことであつたと思ひます。

唯優のために一言したいのは、新作物のシテとしてモツト力を入れて活動してほしいことで、少くもモツト熱のあるやうに見えるやうに努力してほしいのです。

先月の肥後の駒下駄、あれは無論新作ではありませんが、お芝居として案外面白く出来てゐます。あの向井善九郎の役は優の柄に眞向きであり、又實際新駒家と二人で中々面白く演じてゐましたが、それでも昔末廣家宗十郎の縫之助で、鴈治郎が若かつた頃やつたのを思ひ比べて相當の距りを覚えるのです。大切な駒下駄を拘られ、死物狂になつて追駈ける、あの猪突的な直情、その熱を以て名人宗十郎にぶつかる處に此狂言の面白味が激増したのです。

嘗てドクトル、ラートで鶏の身振を強いられた時のあの悲壯な絶叫に成功した豊田家である。其年醜、その位置、そして其技倆から考へ、關西劇壇の陣頭に立つて其全力を盡すべき時は今であると、私は固く信するのであります。



新宿第一劇場で 見た若手歌舞伎

森あき子

學年末の休みの間を利用して東京へ行きました。東劇の舞踊協會のなごりと、日比谷公會堂の團菊祭と、新宿第一劇場の若手歌舞伎とを見物する爲でした。新宿へは四月二日に出掛けました。番組は鏡山、石切、勸進帳、御所の五郎藏、研辰の討たれ、元祿花見踊などでした。

何より驚いてしまったのは、扇雀さんの梶原でした。お父うさん厩治郎さんの悪い癖もなく、餘り細い芝居をするやうなこともせず、關東の若手と相對してゐるのを見て私は嬉しくなりました。やつぱり修業地は東京だと思ひました。義經など本當に立派なもので、聲の出し方に注意してゐたのも結構なこと

です。お初は體のせいか軽い感じがしましたが、することは随分上手だと思ひました。松蓮さんは色氣のある可愛い聲を出すので好きです。娘方より年増の方が似合ふのかと思ひます。

成太郎さんの梢も可愛く扇雀さんと共に非常な技の上りかたなので、全く驚いてしまひました。關西の方に早く見せたくなりました。我當さんの辨慶は元氣もあり、熱もあつて、何だか自然にこつちまで引込まれて行きました。その外、大庭と土右衛門と研辰で九市郎と出づけてゐて、疲れ

も見せないのは豪いことです。勘彌さんは何より綺麗でその上威勢がいゝから好きです。それに何をしても器用な人で、どうしても好き

にならないではゐらません。富樫も思つてゐた以上に立派で、決して羽左衛門にも負けはしませんでした。鶴之助さんの逢洲も奇麗

あり、熱もあつて、何だか自然にこつちまで引込まれて行きました。その外、大庭と土右衛門と研辰で九市郎と出づけてゐて、疲れ

辰はお父さんの猿之助さんにソツクリで、よくまああれ程似たものと思ひました。研究もかなりよくしてゐられたやうです。

この一座の人達を今度は五月の大阪歌舞伎座でまた見られるのかと思うと、今から楽しみで、嬉しくて嬉しくてなりません。本稿を寄せられた森あき子嬢は森ほのほ氏の令嬢です。

明治廿六年以來上演されなかつた「肥後の駒下駄」を觀て、其當時はさておき今日に於ても案外面白く見られた。恐らく歌舞伎に對する認識の薄い人にしては興味深く思はれた事であらう。そして又どちらかと云へば大衆よりかけ離れた、ある歌舞伎である丈にかゝるものゝ上演は大衆に呼び掛くると云ふ點に於ても意味ある事と思ふ。筋そのものとしても大衆本位のもので、仲間時代駒下駄で受けた恥辱の復讐に三年間もその駒下駄を身につけ諸國修業の上その返報をするると云ふ其間、主人の仇討等織込まれてそこに波亂萬丈が繰り擴げられると云ふんだから、他愛もないと云へばそれまでだが又反面みよりに依つては面白い――肩の凝らな面白さだ。それ丈に五幕十五場通じて印象に残るといふ所もない。大體この芝居の本筋である駒下駄よりも織込まれて居る仇討の方が數等面白

肥後の駒下駄 を觀て

谷 健 一

面白さだ。それ丈に五幕十五場通じて印象に残るといふ所もない。大體この芝居の本筋である駒下駄よりも織込まれて居る仇討の方が數等面白

い。それで又全體としても
救はれて居る譯だ。

胸下駄丈の問題ならば退
屈みて居られない。五幕
十五場の内仇討を中心とし
た地藏繩手より高輪大木戸
迄十場(壽三郎の善九郎が
舊主秀之進、矢阪兄弟に殺
された事を知つて助太刀に
乗り出す迄)壽三郎と小太
夫が大活躍。小太夫の人間
味ある源次兵衛が面白い。
併し最初出て来た時の源次
兵衛よりこゝになると余り
にも性格に於てかけ離れず
ざる。これでは劇人としか
思へない。芝居を面白く見
せんが爲だつたらもう少し
研究の要がある。

併し彼の奮闘は目覺まし
い。猿之助を髣髴とさす敷
場面があつた。大乘寺境内
で藤棚の上へチヨコンと坐
つてゐた姿が、研辰の討た

れ//を思ひ出し、小栗栖長
兵衛//を思ひ出した。壽三
郎は流石斷然光つてゐる。

一徹な善九郎を巧まないあ
の藝で樂々と演つてゐる。
この人近頃みる毎に巧くな
つて行く様な氣がする。魁
車を向ふ廻にしての芝居も
反つて魁車の方が少さくみ
える。柄から受ける感じだ
けでなく、大詰になつて魁
車の縫之助、その人らしく
なつて来たが序幕、矢阪源
次兵衛の邸では文武秀でた
縫之助にはみえなかつた。
そしていやに身體を振るの
が目ざわり。市藏の月岡刑
部、流石老巧。こんな役に
なると手に入つたものだ。
そしてこの人に依つて芝居
らしくなつて来る。

いつも感ずる事なんだが
臺詞の低調な爲聞き難い。
最後の縫之助の邸から月岡

邸の廣間になつて歌舞伎臭
が出て来る。全ての結末が
案外あつけない様だ。芳子
の月岡の娘松江が可憐な内
に色氣をみせて呉れたのが
嬉しい。相變らず淋しく思
つたは長三郎の松田新藏、
外に秀郎、福助、瑤藏の顔が
一寸みえた。いつみても大
きい福助と二人が小さい丈
に三人並んだ時、特に目立
ち寧ろ滑稽にさえみえた。
通じて舞臺裝置が、お粗
末、貧弱にみえた。只壽三
郎の熱演に思ひをとめる
この芝居を觀ても壽三郎の
將來に益々囑望する所があ
つた。近き將來には一方の
旗頭として彼の兩目躍如た
るものがある事を信じた。

次號六月號は
五日發賣!

青山の甘納豆

南區心齊橋北入

青山心齊橋店

電船場一三三七番

萬人向の

御内祝に
御進物に
御供養に

甘納豆を

天王寺區庚申前

青山總本店

電天王寺二〇〇七番
二五六三番

編輯後記

◆五月。爽かな新緑號を送ります。内容もまた季節にふさはしき爽かきです。肌心良いそよ風にゆらく川べりの幟幕の下で、楽しくお書き下さい。

◆前號の家庭劇樂屋風景に續いて本號では關西新派のそれをお目に懸けました。お約束をした梅野井氏と瀧嬢との特輯記事も他誌ではみられない陣容を盛つて掲載出来たことを嬉しく思ひます。來月號では折からの五月興行に南座來演中の關西歌舞伎の方々の本陣を突かうと云ふ企みを持つてゐるのですが、どうでせうか。

◆型付は目下歌舞伎座上演中の問題の「勸進帳」に因んで、これを選択致しました。今後三回位の續稿となるはずですから幸ひに御愛讀を願ひます。(京都・大橋孝一郎)

◆京都支局の大橋君の活躍で特輯讀物が豊富に出来たのは讀者の皆様と共に悦びたい。

◆本月各座の陣容は歌舞伎座の花形大歌舞伎浪花座の新國劇續演、中座は家庭劇が歸演五日よりは角座へ辻野一座がお目見得。

◆南座は竹田出雲の二百年を記念して、關西大歌舞伎が出演してゐる、將に颯爽たる關西劇境である。

◆作談としては、特に落合浪雄先生額田六福先生が御繁忙中にもかかわらず御寄稿せられた、誌上より御禮申上げます。

◆承らく御愛讀を賜つた都築文男氏の連載ものは惜しくも、本陣をもつて終りである。次號からも、本誌ならではの續きものを掲載する豫定である。(村上勝)

昭和十一年五月一日發行
月刊『道頓堀』第十一年
第百十六號

◆誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◆郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◆御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。
大阪市北區中之島三丁目

一部 金參拾錢 (郵錢五厘稅)

昭和十一年五月一日印刷
昭和十一年五月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店

發行者 島江 鏡也

共同編輯 山本 泰三

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯 京都支局
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始確 辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹼

專賣特許 審用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



發賣元 大 阪
朝日堂株式會社

本舖 大 阪
中田スキナ屋謹製



昭和十二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年四月三十日印刷
（毎月一回）

主演
林長二郎

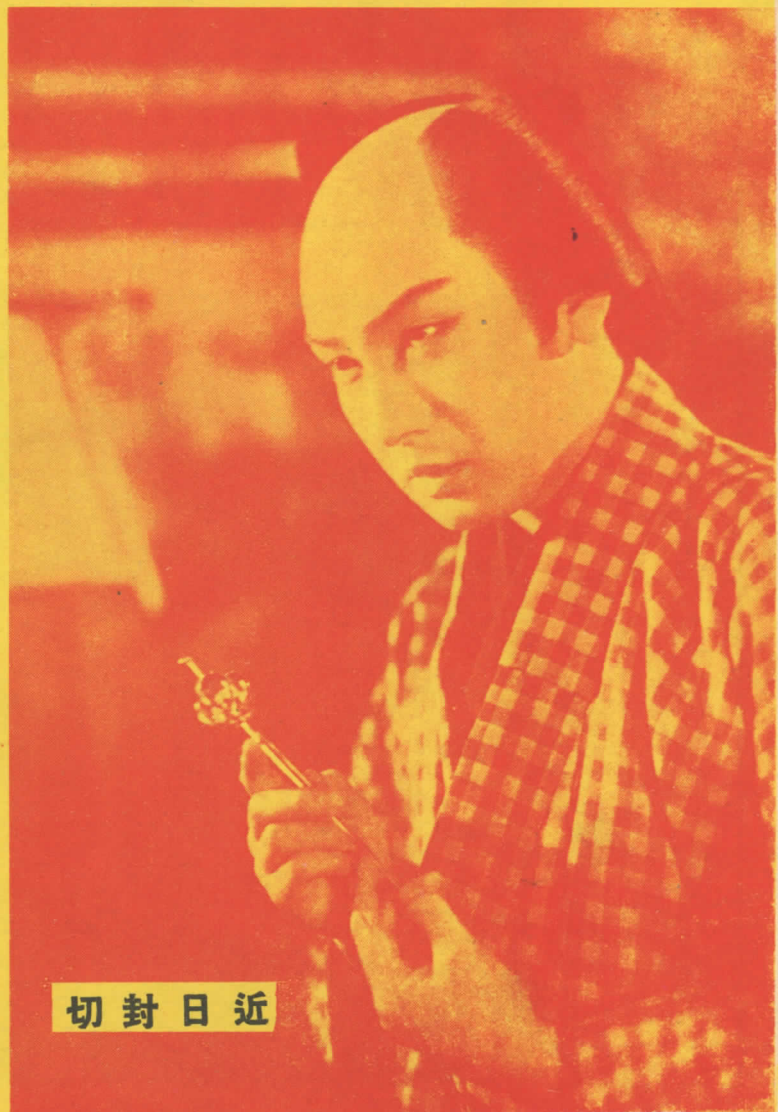
★
大曾根辰夫 脚監督

眞山青果氏原作
伊藤武夫撮影

★
田村邦男
結城一朗
特別出演

柳北坪高山澤風天高小
見井路堂井間野松島
さく禮義國三宗及錦之
子哲人典郎一助子
子子子子子子子子

★
演



近日常封切

荒川の佐吉
松竹京都撮影所超大作オール・トーキー

（道頓堀）
第百十五輯 第十一年 五月號

一部金參拾錢